

ブ
め
イ
や
テ
は
イ
仰
ネ
信
な
さい

はじめに

学校で習う英語は実戦で役立たない。だから「使える英語」を身につけたいのならば英会話学校へ通ったり、イギリスやアメリカへ留学したりしなくてはならない。長い間日本ではこういうことが言われてきました。本当にそうなのでしょう？学校で習う英語では外国の人とコミュニケーションをとることはできないのでしょうか？学校英語は何の役にも立たないのでしょうか？

ここで結論を簡潔に言えば、学校で習う英語は役立たないどころか、これを極めれば帰国子女をも上回る「英語の達人」になることも可能だということです。無論、英会話学校や語学留学などの必要はまったくありません。

こう言ってもすぐには信じられないかもしれませんが、しかし、本書を読み進めるにしたがって、必ず考えが変わってくるはずです。そう信じて、かつて私に英語を教えてくれた学校の英語の先生への感謝の気持ちをこめて、本書を著しました。

資本主義体制をとるわが国では、ややもすれば商業主義に走り、誤った情報が流され、その結果国民にとって必ずしも利益とはならない状況が現出することがあります。英語教育もその一例で、圧倒的な資金量で偏った情報が長年流され続けた結果、多くの国民が不利益を蒙ってきました。しかし、この状況はそろそろ変わらねばなりません。

みなさんが本書を読んで英語に対する正しい認識を持ち、これをしっかり学習して、将来国際社会でも臆することなく活躍できる人材となることを願ってやみません。

本書の内容

序章 学校英語は「英語の達人」を創る

- 山川君はなぜ英語が話せたのか？ 8
- そもそも英語を話すとはどういうことなのか？ 9
- 「英語の核」 10
- 英語スピーキングは4段階 11
- カジュアルスピーキング(英会話)の本質 12
- 学校でカジュアルスピーキングを教えないのは 14
- 読み書きの習得でなぜ話せるようになるのか？ 15
- 「英語の核」のまとめ 15

第1章 ネイティブ信仰はやめなさい

- 「ネイティブ」の流行 18
- ネイティブは英語を教えることが出来ない 18
- 実はネイティブは文法を知らない① 21
- 英語ほど簡単な言語はない 22
- E S N A (エスナ) とは 22
- スピーキング能力は伝染しない 23
- 日本人だって日本語が怪しい 24
- 英語を学習していないネイティブ 25
- ネイティブ信仰はやめなさい 26
- 実はネイティブは文法を知らない② 28
- ネイティブより辞書と検索サイト 30
- 「ネイティブに通じる英語」は幻想 32
- 「ネイティブの生きた英語」も幻想 34
- ネイティブは英作文の指導が出来ない 36
- 論理とは何か 37

実はネイティブも発音がわからない	40
絶対に必要な日本語による説明	41
ネイティブを上回るノンネイティブ①	42
ネイティブを上回るノンネイティブ②	44
帰国子女信仰もやめなさい	47
文法の重要性について	49

第2章 日本人に必要なのは国際英語

間違いを気にしては永遠に英語は話せない	52
英語の上手なノンネイティブを目指す	54
英語は地域英語と国際英語の二種類	54
日本人に必要なのは国際英語	56
共通語を習いに東京へ行く？	57
フィリピン人、オーストラリア人の嘆き	58
上手な英語を話すには	59
スピーキングの練習は一人でも可能	62
音読について	64
NHK英語の謎①	66
かっこいい発音より聞きやすい発音	68
話す速度についての補足	69
単語の発音耳で覚えるのは至難の技	70
和製英語などについて	71
決まりきった会話表現	72
「すぐ使える会話」では限界がある	75
単語が出てこない場合	77
難しい日本語が浮かんだ場合	78
映画での勉強	79
日本を知ることの大切さ	80

海外留学について	81
NHK英語の謎②	83
NHK英語の謎③	87
「英作文の書き方」は存在しない	90
国語が出来ないと英語も出来ない	91
論理をどう身につけるか	92

第3章 英語産業にご用心

「聞けなければ話せない」は大嘘	96
リスニング上達のポイントは3つだけ	98
聞き取れない理由	98
リスニングの訓練法	99
集中することが一番大事	100
電車内でのリスニングは効果はない	101
「速聴」「精聴」は不正確	101
私のリスニング特訓物語①	102
私のリスニング特訓物語②	104
「聞いてるだけで話せるようになる」は大嘘	106

巻末資料

リスニング出来るサイトの紹介	109
決まりきった会話表現	113
平成21年大晦日のBBC放送のニュース	119

序章

学校英語は「英語の達人」を創る

山川君はなぜ英語が話せたのか？

以前東京の大手予備校で講師をしていた頃、同郷の山川君という生徒がいました。私が沖縄で講師をしていた時の生徒でもあり、東京の予備校で教えることになり、上京した時に彼も一緒についてきて一年ほど共同生活をしたことがありました。

彼は二浪目ということもあり、まじめに勉強したので、社会的に評価の高いある大学に受かったのですが、そこを蹴ってあえてそれほどの知名度はない大学に入学しました。

その大学は海外留学に力を入れていて、英語が好きだった彼はそこを選んだのです。それからしばらくは彼と会う機会はなかったのですが、二年後に再会しました。その時の話が非常に印象に残っています(それを後に本に書くとは思いませんでしたが)。

彼はアメリカのオレゴン州にある大学に交換留学生として通ったようですが「先生、英語って思ったよりも話せるんですね」と言うのです。

彼によれば学校英語、受験英語ばかりやってきて、英会話の練習などまったくやったこともなかったのに、話せるか心配だったが自分でも意外なほど話すことができたというのです。それを聞いた私はまったく驚くことはありませんでした。

なぜなら私にも同じような経験があったのです。それは初めて「英語を話せた！」という実感があった二十一歳の時のことでした。

当時私は東京の私大に通っていました。英語と言えば、それまで学校英語、受験英語ばかりで(特に文法が得意でした)まったく英会話の練習などやったことがなかったのですが、ひょんなことから英語圏の友人を持つ機会に恵まれました。

いきなりの実戦です(笑)。しかし、英会話の練習などまったくやったことがなかったにもかかわらず、英語で話すことにかなりの程度成功したのです。向こうの言うこともわかるし、こちらの言うことも向こうは

わかる。私は自信を持ちました。人間不思議なもので自信を持つとますます上達するようです。

このときの経験から、私は「学校で教える英語は実用英語とは異なるもので実戦ではあまり役に立たない」という世間一般の風評は大間違いであることを悟ったのです。留学どころか海外旅行にも英会話学校にも行ったことはありません。その後も、外国の人（ネイティブも含めて）と英語で話す機会がありましたが、何の苦勞もすることはありませんでした。バングラディシュの人の余りにもなまりのある英語がわからなかった以外は（笑）。

それはさておいて、私が言いたいのは「学校で習う英語は確実に役に立つ」という事で、それさえしっかりやっていたら本当は英会話学校などに通う必要はないのです。

そもそも英語を話すとはどういうことなのか？

そもそも英語を話す（スピーキング）とはどういうことなのでしょう。英語を話す場面を想像すると、普通は相手がいってその相手に向かって自分が英語を話しているといった状況を思い浮かべるとと思いますが、それをさらに細かく見ていくと、「英単語を口頭で並べている」ということに気づきます。

簡単な例でいえば、相手に自分の気持ちを伝えようとして、I love you. と「話す」としましょう。この場合、I と love と you の 3 つの単語に音声をつけて並べていることになります。これはもちろん日本語を話すときでも言えることで、「話す」というのは単語を口頭で並べることに他なりません。これはどんなに長い文であってもそうです。

従って英語が話せるようになるには、英単語を口頭で並べる練習をすればよいのです。しかし、もちろんその前に下準備が必要です。それは何かといえば、英単語を覚えることと、英単語を並べる際の規則（文法）

をしっかりと理解するという事です。これらの準備ができたならばあとはひたすら英単語を並べる練習をする(スピーキング)だけです。

長い間「日本人は英語の読み書きは上手だが話すのは苦手なのは学校英語の欠陥である」といったことが言われてきました。この考えに私は与しません。学校英語をきちんと習得したならば「話せない」ということは絶対にありえません。すでに述べたように私は学校英語以外の英語をやったことはないのに話せたのですから、当然それは学校英語のおかげ以外の何物でもないはずです。

「学校英語を勉強しても話せるようにはならない」などと誤ったことを言う人は間違いなく学校英語をきちんとやっていない人です。職業柄、英語の上手な人を多く見てきましたが、彼らは100パーセント学校英語を一生懸命勉強してきた人達でした。ですから「学校英語さえしっかりやっておけば、絶対に話せる」と断言できます。

「英語の核」

私の高校時代の英語の先生の話をしてします。私は沖縄県立浦添高校という勉強そこそこスポーツそこそこといった学校へ二十分ほど歩いて通っていました。英語に関して私が二年、三年の時に習った富真先生は非常に実力のある、また指導に熱意を持った方でした。戦後食べるために米軍相手に通訳をやった経験などもあり、当時としては持っている人が少ない英検一級保持者でもありました。私のような英語好きばかりではないので、そうでない生徒にも興味を持たせるようにグループを組ませて授業を進めたりしていました。

授業自体はオーソドックスで特に特徴があるわけではありませんでしたが、ひとつ非常に印象に残った言葉があります。それは「**今教えているのは英語の大事なことであって、将来英語を話す時、絶対に必要だ**」という内容の言葉です。

その当時は英語の読み書きばかりしていて、読み書きはできるようになるんだろうが、話せるようになるんだろうか？という思いを持っていました。結論を言えば、富真先生の言われたことはまったく正しいものだったのです。それでは「今教えている英語の大事なこと」とは何なのでしょうか？私の考えはこうです。学校で教えている英語は「読み、書き、話す」がオールラウンドにできるようになるための「英語の核」である。以下でもう少し詳しくみてみましょう。

英語スピーキングは4段階

英語を話す、には次の4つの段階があると思います。

① 片言スピーキング

これは単語をいくつか並べる程度の簡単なもので、レストランで Hamburger (please). とでも言えば、片言とはいえ英語を話していることになります。

② カジュアルスピーキング

いわゆる英会話と呼ばれるものです。友人や家族など親しい相手と交わされるくだけた話し方です。

③ フォーマルスピーキング

上司などを相手にした時などの丁寧なきちんとした話し方です。いわゆるビジネス英会話と言われるものと大体同じです。

④ 論理的スピーキング

例えば国際会議で演説したり、討論するときの話し方で、当然内容的に難しくなります。

(注)状況では、これら各々の中間くらいという事もあるでしょう。

私の考える「英語の核」というのは「読み書き」に加えて上述した③④

のスピーキング能力ということです。世間でいうところの英会話とか生きた英語などというものは②のカジュアルスピーキングのことであり、学校英語で身につくのはこれを超えた「きちんとした英語、論理的な英語を話す」能力なのです。

この能力は②のカジュアルスピーキングを含むので、これを習得すれば、あらゆる場面において英語を話せるようになるのです。「そんなこと言たって、映画の字幕を見ると学校英語とはちょっと違うようだけども？」と思う方がいるかもしれません。次の項で詳しく説明します。

カジュアルスピーキング(≒英会話)の本質

親しい間柄では通常②のカジュアルスピーキングの形式で会話するのが普通です。これは日本語でもそうですよね？友達に「明日ご都合はよろしいでしょうか？」なんて言わないはずですよ。「明日空いてる？」でしょう？英語のカジュアルスピーキング(いわゆる英会話)には次の特徴があります。

- ①省略が多い
- ②スラングが使われることがある
- ③かしこまった(フォーマルな)言い方はしない
- ④体言(名詞)止めが使われることがまれにある

①の省略については例えば

A What will you do tomorrow? に対して

B Read. などのような言い回しがカジュアルスピーキングではよく使われます。これは I will read. の I will を省略したわけですが、こういう答え方はカジュアルスピーキングではOKでも上司などが相手のフォーマルスピーキングではよくありません。それは上司から「君は明

日何をしとるのかね？」と聞かれて「読書」などどっつけんどんな返事をしないのと同じことです。ですから英語でも気をつけましょう！

②のスラングですが、これは日本語では俗語などと訳されるような言葉で、例えば I ain't a musician. の ain't で、これはbe動詞の否定形として使われることがあるのですが、きちんとした英語ではありません。スラングは例えて言えば日本語の「すげー」みたいな響きを持つ「きれいではない」英語なので、使用は極力差し控えるべきです。

③については、例えば May I have your name? (お名前を伺ってもよろしいでしょうか?) と言えば非常に丁寧に聞こえ、フォーマルスピーキングではこういう言い方をしますが、カジュアルスピーキングでは What's your name? (名前は何ですか?) でOKです。時には Your name? (名前は?) なんてこともありえますが、こんなぶっきらぼうな聞き方はよほどのことがなければ使ってはいけません。

④体言(名詞)止めについては、例えば昔見たアメリカ映画の切迫した場面で Running out time! と登場人物が叫ぶシーンがありました。文法的には Running out (少なくなりつつある) という分詞形容詞が名詞の time を修飾していて、これ全体で名詞になっています。

Time is running out! ならば SVC の文になっています。これを Running out time! と体言止めにする事で、簡潔かつ力強さ(切迫感)が感じられます。ただし、体言止めの表現形式は頻繁には出てこないものでそう気にする必要はないでしょう。

以上がカジュアルスピーキング(いわゆる英会話)の特徴です。どうってことはありません。では、なぜ学校でカジュアルスピーキングを教えてくれないのでしょうか？

学校でカジュアルスピーキングを教えないのは

それはそうすると、低いレベルの英語しか身に付かないからです。すでに見たように、カジュアルスピーキング（いわゆる英会話）は基本的にフォーマルスピーキングをくずしただけに過ぎませんし、フォーマルスピーキングよりずっと簡単な英語だからです。

大は小を兼ねることわざ通り「きちんとした英語、高度な英語」（＝フォーマルスピーキング）さえ習得すれば、それよりも易しいカジュアルスピーキングの習得は楽なのです。しかし、逆にもし学校英語が小（＝カジュアルスピーキング）の習得を目標にするのであれば、大（＝フォーマルスピーキング）は絶対に習得できませんし、きちんと読み書きできる英語力も絶対に身につけません。

なぜならカジュアルスピーキングに要求される程度の英語力ではあるレベル以上の英語を読んだり、書いたり、話したりできないからです。繰り返しますが、フォーマルスピーキングに要求される高度な英語力を身につけておけば、それよりも易しいカジュアルスピーキングの習得は楽勝ということなのです。

学校英語ではきちんとした「英語の型」を教えて、あらゆる場面で応用できる真の英語力の養成を目指しています。そのために高度な英文を読んだり、書いたりさせますし、またそれに必要な文法も教えているのです。ここで、「英語の読み書きでなぜ英語を話せるようになるのか？」という疑問がわくかもしれません。これについては次項で説明します。

読み書きの習得でなぜ話せるようになるのか？

それはフォーマルスピーキングとは読み書きを口頭で行なうに過ぎないからです。BBCはご存知のようにイギリスのNHKともいうべき放送機関

で、その巨大なサイトで音声つきでニュースを24時間放送しています。BBCのニュースでアナウンサーが話す英語は当然フォーマルスピーキングで、スクリプトも公開していますので一度見てもらいたと思います(巻末資料に一例を掲載しました)。

驚くかもしれません。彼らの話す(きちんとした)英語が学校教科書などに出てくる「書かれた英語」とまったく同質のものであることに。

これは別にBBCに限ったことではなく、きちんとした放送局のニュースで話される英語は例外なくこのような英語なのです。ニュース以外では国連などの国際機関で話される英語、英米などの政府関係者の話す英語も、一流の国際企業で話される英語もすべてこのような書き言葉と同質、すなわちフォーマルな英語なのです。

英語の書きことばとフォーマルな話し英語が同質のものなのですから、英語の書き言葉を一生懸命勉強すればフォーマルな話し英語が身につくのは当然ですし、それをくずしたに過ぎないカジュアルな英語スピーキングが身につくのも当然のことです。

「英語の核」のまとめ

学校英語が目指しているのは「英語の核」を形成することだとすでに述べました。ここでまとめましょう。

「学校英語は主に読み書きを中心としていて、話すことに主眼を置いていないように見えるがこれは少々浅い認識である。実際には学校英語を習得することにより、きちんとした英文を読んだり書いたりできるようになるだけでなく、いやゆる英会話をはるかに陵駕する高度な英語スピーキング力が身につく。さらに研鑽をつめば英語の達人にすらなれる。」

かつて富真先生の言われたことはこういうことであったと私は理解し

ています。英語の達人とはどのような人を言うのでしょうか？真っ先に思い浮かぶのは一流の通訳者かもしれません。それから一流の翻訳者といった人たちでしょう。帰国子女に英語スピーキングの指導をするような英語講師もそうでしょうし、国際ビジネスで、英語を使って自由自在に意志の疎通が図れるような方々も英語の達人と認定してもいいでしょう。

これらの人々に共通するのが学校英語を一生懸命勉強した人たちであるということです。留学やネイティブから…ということでは絶対にありません。あくまで学校英語で徹底的に「英語の核」を作り、卒業後は主に国内で研鑽を積んで英語の達人になったということです。私はこういう人を多く知っています。

ですから本書を読んでいるみなさんも学校英語をきちんと習得してください。必ず英語ができるようになります。留学や英会話学校などにお金を多くかけるのは懸命ではありません。「英語の核」さえ作っておけば、あとは学習を継続しさえすれば超高度な英語力が身につきます。

次章以降では英語学習といわゆる「ネイティブ」について説明します。これで学校英語で英語の達人が創れることがさらにはっきりと理解できるはずです。

第1章

ネイティブ信仰はやめなさい

「ネイティブ」の流行

私が学生の頃はあまり耳にしませんでしたが、最近よくネイティブという言葉を目にしますね。ネイティブとはその言葉を子供の頃から話す人のことで、たとえば日本人は日本語のネイティブ、アメリカ人イギリス人は英語のネイティブです。日本国内で「ネイティブ、ネイティブ」と言っているのはほとんどの場合、英語のネイティブすなわちアメリカ人、イギリス人などを指しています。

そして、今日本の英語学習界ではこの「ネイティブ英語」が大流行しているようです。つまり、「アメリカ人やイギリス人などから英語を習ってネイティブのようになろう！」ということで、英会話学校や英語学習教材、参考書などが非常に売れているようです。

特にネイティブという言葉を使わないだいたい以前の時代から日本人は英語、特に英会話が上手になるには留学したり、英会話学校へ行ったりして、生の、本場の英語に触れるのが一番というふうに思い込んできました。でも、本当はそうではないのです。これはまったく誤った考え方で、実はこれこそが日本人が英語スピーキングを苦手とする最大の原因にすらなっているのです。

本書を著した一番の目的はこのような誤った認識を変えて英語に対する正しい取り組み、考え方を広めたいということにあります。本書を読んだあと、英語に対する考えが一変して、学校英語最強論にうなづくことでしょうか。

ネイティブは英語を教える事が出来ない

多くの方はこう言われたならば信じないでしょう。「嘘を言うな。現実に英会話の学校でネイティブが英語を教えているじゃないか」と思うことでしょうか。確かに彼らはそこにいます。そうでなければ、それを目

当てに入会金、授業料をまとめて(のことが多い)払った人たちが暴動を起こす騒ぎになるでしょう。しかし、彼らはとりあえずそこにおいて、教えているように見えるのでそうはならずに済んでいます。

しかし、彼らは教えているのではないのです。話し相手になっているだけなのです。その説明の前にまず「逆から考えて」みましょう。例えばフランス語のできない(普通出来ない)あなたがフランスへ行って日本語を教えることになったとしましょう。日本語を教えられますか?できないはずです。私は絶対にできません。なぜ出来ないか、相手の生徒を初級、中級、上級の三つに分けてそれぞれ検証してみましょう。

A 生徒が初級者の場合

生徒はまったく日本語を知りません。このような状況で一体どうやって説明できるのでしょうか。例えば「花」を指して「はな」とやれば、生徒はそれを日本語では「はな」と呼ぶんだとわかるでしょう。このようにして、簡単な単語を教えることは出来ても、例えば「おはよう」が朝の挨拶であることをどうやって相手に伝えるのでしょうか。一緒に住んでいるのなら相手も気づくでしょう。

しかし、通常授業が行われる教室ではこれは出来ません。あいさつすら説明できない、教えられない状況では簡単な文(例えば、私は2年前車を買いました)ですら教えるのは不可能でしょう。想像してみてください。このような状況で日本語を教えることが出来るかどうか。私も想像してみましたが諦めました。

B 生徒が中級者の場合

この場合、話し相手にはなれます。相手はある程度日本語がわかるので、あなたの言うことをある程度は理解できますし、ある程度自分の考えを伝えることもできます。でもこれは教えているのとは違いますよね。教えるというのは「これこれこうだから、こうだ」と説明することを言

うはずです。例えば「それは仕方がない」という表現を相手が知りたいたとします。

相手は「それは仕方がないはどう言いますか？」と日本語で質問してくるわけはありません。知らないのですから。当然フランス語で「O@AE #&IJ\$？」と質問してくることでしょう。意味がわかりますか？わかれば「ああ、それなら…」となりますが、あなたはフランス語を知らないのです。したがって相手の言うことを理解できず当然、教えることも出来ません。

C 生徒が上級者の場合

これはだいぶ楽ですね。相手はかなり日本語の表現が豊かなので、あなたはそれを理解できるでしょう。でも3つ問題があります。

①一つは日本語がこの位できるのなら、そもそも習いに来ないことです。英会話学校でもそうですが、上のクラスの生徒の数はごくわずかでしかありません。自分に当てはめてもわかるでしょう。英語ぺらぺらならお金を払って習いに行きますか？そういうわけでこういう上級レベルの生徒はまずいません。いればただ話すだけでいいので楽でしょうが。

②二つめは、このレベルの生徒の質問はかなり込み入った難しいものが多いので、これに答えるのは相当な困難を伴うということです。よほど日本語を勉強しなくてはなりません。この章の「日本人だって日本語がわかっていない」の項を読んで下さい。日本語の質問ですが何問当たるか。半分も当たれば上出来で、こういう質問に答えられる日本語講師はわずかなはずです。残りは答えられない、説明できない、すなわち教えられないということです。

③最後は、上級レベルの生徒なら日本語ネイティブに聞くよりも辞書

や参考書そしてグーグルで正しい答えを見つけるということです。ちょうど私が英語に関してそうするように。

人間一人の知識、頭脳は限られています。いかな優秀な日本語ネイティブよりも、多くの専門家が時間と労力をかけて作り上げた日本語辞書のほうがはるかに信頼できるのです。このように上級レベルの生徒は自分で調べるし、またそもそもお金払って習いにきません。自分で出来ますから。

実はネイティブは文法を知らない①

どのレベルにも共通していますが、文法は重要です。これを教えなければただ単語をいくつか並べる程度の会話しかできないからです。ところがネイティブ(何語でも)は自分の国の言葉の文法を知らないのです。このことはあとで詳しく説明していきますが、この大事な文法がわからないでどうやって相手に教えることが出来るでしょうか？出来ないはずです。

フランスでの話を例に取りましたが、話をもとに戻すと、英語のネイティブ(日本語わからない)が日本人に英語を教えることができるかということでしたね。出来ないはずです。今検証したように、フランス語のわからない日本語のネイティブ(日本人)がフランス人に日本語を教えることが出来ないように、日本語のわからない英語ネイティブが日本人に英語を教えることは不可能なのです。

これでわかったでしょう。いや、この位ではまだわからないはずですよ(笑)。長年しみ込んだ固定観念というのはそう簡単に変わるものではありません。それを変えて英語学習に関する正しい考え方、学習法さらには日本人としての誇り、自信を持ってもらえるように書いたのがこの本です。どうぞ、最後までお読み下さい。今まで見えなかったことが見えてくるはずですよ。

英語ほど簡単な言語はない

実は英語ほど簡単な言葉はそう多くありません。英語は難しいと考える人が多いようで、これだけ英語関連の学習参考書があるのはそのひとつの証拠でしょう。しかし、世界的に見ても英語ほど簡単な言葉は少ないはずです。例えば大学でフランス語やロシア語などを学んだ人はそれらがどれ位難しいのかお分かりだと思います。

ドイツ語も難しいですし、ギリシャ語にいたってはIt's Greek to me. (僕にはちんぷんかんぷんだ)という表現があるほどです。日本語にしても、敬語やら、謙譲語など、日本語のネイティブである日本人にとってもその習得はなかなか容易ではなく、私もよく間違えます(笑)。外国人にとってはそもそも漢字なんていうややこしい文字を覚えるだけでも気が遠くなることでしょう。

それとくらべれば**英語ははるかに与しやすい言語**なのです。世界中で英語を話す人が8億5千万人と言われていて、そのうち半分強がノンネイティブ、すなわち英語を外国語として話す人々です。

これだけの人が英語を話し、また国際的な会議や貿易、インターネット上で使用される言語の多くが英語である、つまり英語が国際共通語として使用されているのはアメリカの圧倒的経済力、政治力だけではなく、その実用性すなわち使いやすい言葉であることに起因しているのです。

その簡単な英語を苦手とする人が多いのは英語に対して誤解をしている人が多いからなのです。

ESNA(エスナ)とは

ESNAはEnglish Speaking without Native Assistanceのacronym(頭字語)でスピーキングの上達はネイティブを必要しないという概念、及びその練習法のことです。ここ数年における英語ブームはこれまで例を見

ないほどのもので、日本中いたるところに英会話学校が氾濫するほどの隆盛を誇っていてその多くがいわゆるネイティブによる指導を売りにしているようです。

このような現象はおよそ日本だけに見られるもので(私は留学はおろか海外旅行すら一度も行ったことがないので断言はできませんが)この状況を見れば日本人の英会話力は大いに向上したはずですが、実際にはどうなのでしょう？

残念ながら、私の知る限り日本人の英会話力が向上した事実はないようです。海外から日本に来る人は不思議に思うようです。本場の英語を話せる人を講師として採用し、ナチュラルな使える英語を学んでもさほど話せない。実に不思議なことです。なぜなのでしょう？

その答えは極めて簡単です。方法が間違っているのです。**ネイティブと話しても英会話力はさほど向上しない**ということなのです。現象を素直に見つめればそう言わざるを得ません。ではなぜそうなのでしょう？

スピーキング能力は伝染しない

詳しいメカニズムはまだわかりませんが小さな子供がある言語に日常的に接しているうちにその言語を習得するのは違い、ある年齢を超えてしまうとこの能力は失われてしまい、その言語を習得するのに苦労することはみなさんご存知のとおりです。

何とか習得しようとネイティブとスピーキングの練習をするわけですが、残念ながら小さな子供とは違ってスピーキング力は「伝染」しないのです。したがっていくらネイティブとの練習を積んでもネイティブが話すように、我々が話せるようにはならないのです。

私見ですが、日本人はイメージといったものに非常に弱いように思えます。車などの広告になぜか欧米系のモデルが登場し、またヨーロッパの高級ブランド品が飛ぶように売れている事実はこれを裏付けているの

ではないでしょうか。

英会話学校についてもそうでネイティブの指導する学校の方がそうでない場合よりも人気があるようです。これはネイティブと練習することによっていつかネイティブのように話せるようになるというイメージのせいでしょう。しかしスピーキング力は「伝染」しないのでノンネイティブがネイティブのように話せるようにはならないのです。

日本人だって日本語が怪しい

我々日本人は日本語のネイティブです。外国で日本語を学ぶ人にはきっと憧れの存在なのでしょう。英語を学ぶ日本人が英語のネイティブに憧れるように。英語を学習する日本人がネイティブの英語を目指しているように、彼らはネイティブ(日本人)のような日本語を話すことを目標に日夜励んでいるはずです。

彼らは彼らにとって究極の目標である(日本語の)ネイティブ(日本人)は日本語を絶対に間違わない、日本人の日本語は常に正しいと思っているはずです。本当にそうでしょうか？

どうも怪しい気がするので、ちょっとテストしてみましょう。日本語のネイティブのみなさん、以下の日本語の中でおかしいものはどれでしょうか？

- ① ときには部長から叱られたこともあった。
- ② 人間は動物に虐待してはいけない
- ③ これはどうも動かしようのない事実なのだ。
- ④ 過去3年間の生活はまるですばらしかった。
- ⑤ 毎日PC作業で、運動不足な毎日です。
- ⑥ 6月に京都で国際大会に向けた準備が進行中だ。
- ⑦ それからしばらく会社での仕事がバカバカしくなった。

- ⑧ 花子は合格の知らせを受けた時、すぐ出かける準備をした。
- ⑨ 竜巻の通過した地域の建物はすべて破壊した。
- ⑩ 自然の驚くようなすばらしさを実感している。

これは、PHP研究所から出ている「町田式一正しい文章の書き方」という本から引用したものです。どれが間違いかお分かりでしょうか？私もやってみましたが、結構間違いがありました。正解は「全部間違い」です。なぜ間違いか知りたい方は町田先生のこの本をお読み下さい。

どうでしょうか。こうしてみると日本語のネイティブである日本人であつても、その日本語力は相当疑わしいものであることにいやでも気づかされます。上の問題を全て正解の人は大学で国語の教授に、逆に全問不正解の人はもう一度中学校へ行って日本語を勉強し直すべきかもしれません。

それはともかくとして、普通の日本人の日本語はかなり怪しいということは理解しておいたほうがいいでしょう。公共放送でアナウンサーを務めるほどの日本語力の持ち主であっても、時折間違ふことがあります(種類としてはイントネーションの間違いが多いように思います)。英語の本なのになぜ日本語の話を持ち出したか、次の項目をお読み下さい。

英語を学習していないネイティブ

ノンネイティブが英語を習得しようとする場合、英語を学習することが必要になってきます。これに対してネイティブは英語を自然に身に付けたのであつて学習したわけではありません。

したがって彼らは英語を自由に操ることはできても英語の学習法を知らないのです。それはちょうど日本人が日本語の学習法を知らないのと同じことです。学習法を知らないのですから、それを教えることはできないでしょう。具体例を挙げれば、先ほどの例のようにあなたがフラン

スへ行って日本語を教えることになったとしましょう。あなたはフランス語ができません。

このような状況で日本語を教えることができるでしょうか。出来ないはずですが。少なくとも私は出来ません。日本語は私にとって当たり前と
思っていて考えた事もない言語です。自然に覚えたので「その学習法は？」
と聞かれても答えようがないのです。

花を指して「はな、はな」などと簡単な単語を教えることはできても、
相手がそれなりの日本語を話せるように指導することは出来ないでしょう。
相手が自分で懸命に勉強するか、また別のところで習えば別でしょうけど。

これと同じように、英語を学習ではなく、自然に使いこなせるようになった英語のネイティブが（日本語を知らなければ）英語を教えるのは不可能なのです。英語の学習法を教えることが出来るのは英語を学習した**もの**だけで、これはサッカーを練習した人しかサッカーを教えることは出来ないのと同じ理屈です。

ネイティブ信仰はやめなさい

日本人の英語が上達しない大きな原因のひとつがネイティブ信仰であると言いました。説明しましょう。日本人英語学習者は「ネイティブから習うのが最も効果的な学習である」「ネイティブの英語は正しい」「英作文の添削はネイティブが一番」と思っているようです。これは書店にこれでもかと並んでいる「ネイティブ…」というタイトルの本の多さを思えば、そう思わざるを得ません。

しかし、本当にそうなのでしょうか？いわゆる英会話喫茶と呼ばれるある所へ行った時の事です。かなりレベルの高い大学に通っているアメリカ人が「何か単語を言って下さい。それについて教えてあげましょう」というのでcardiovascular(心臓血管病の)というちょっと難しい単語を

ぶつけました。

すると相手は何か違うことを言ったので私はそう指摘しました。相手は慌てて辞書を引き、自分の間違いを訂正しました(まだ学生ですがあいう所では一応先生という事になっているのでちょっと悪いことをしたかなと思いましたが…)。

さらに同じところですが、カナダの大学院を出たこれもまた勉強していそうなネイティブがconspiracyについて説明を始めたのですが、違うことを言ったので私が「共謀は最低二人の人間を伴う」と発言したところ、相手はきちんと訂正しました。

このような事は他にもありましたが、当然のことだと思っています。なぜなら、**母国語を完全に理解している人は一人もいない**からです。日本人学習者は「ネイティブ」という錦の御旗を見せ付けられると「絶対に正しい」と思い込んでしまいがちですが、逆の立場で考えれば本来容易にわかることなのです。

つまり、我々日本人が日本語を話したり、書いたりする時に間違わないのでしょうか？たくさん間違はずです。むろん、私もそうですが。言葉のプロであるはずのNHKアナウンサーでさえ、間違うことがあります。これが普通の人ならなおさらでしょう。**日本人であっても日本語を結構間違う。それならば英語を母語とする人々も英語を結構間違う**のではないのでしょうか？もし間違わないという根拠があるのなら、知りたいくらいです。

これを別の単語に置き換えてみましょう。英語を母語とする人というのは英語のネイティブですね。するとこうなります。(英語の)ネイティブであっても英語を間違う。どうでしょうか？これでネイティブという魔法のような響きを持った言葉に対するイメージが少しは変わってきたのでしょうか？

もちろん、(英語の)ネイティブは英語をよく知っています。我々日本語のネイティブが日本語をよく知っているように。

しかしそれでも数十万ある語彙の中で知っているのは限られていますし、中にはうろ覚えや誤って覚えたものも混じっていて、ネイティブも間違えるのです。

ですからネイティブの英語は絶対に正しいなどというネイティブ崇拜、ネイティブ信仰を捨てて、**ネイティブも人間だ、間違えるという正しい認識**をこれからは持ちましょう。そうすれば、これまで見えなかったものが見えてくるはずです。

実はネイティブは文法を知らない②

初めのほうでも少し説明しましたが、ここで詳しく説明しましょう。びっくりしたかも知れませんが、これは本当なのです。文法はネイティブだから知っているとは限りません。いや、むしろ知らないほうが普通なのです。

「逆に考えて」下さい。**日本語の文法知っていますか？**ほとんどの人が知らないはずです。中学辺りで一応やっているはずですが、日本語の文法は英語の文法より難しく、きちんと理解できた人はあまりいないはずです。また理解したとしてもその後、やらないので忘れてはいるはずで

す。

なぜ日本人は日本語の文法をきちんと学習しないのでしょうか？それはその必要がないからです。我々日本語のネイティブ（日本人）は日本語の文法を知らなくてもまったく困ることはないのです。

そうでしょうか？普段普通に日本語がしゃべれるはずですから。ところが外国人が日本語の学習をするとなると日本語の文法を知らないのは致命的です。

なぜなら、彼らは我々のように自然に日本語を話すことが出来ないのです、文法を学んでそれを手がかりに日本語を話す必要があるからです。ですから、我々日本語のネイティブよりも日本語の**ノンネイティブ（外**

国人)のほうが日本語の文法を知っていることはむしろ普通なのです。もちろん、きちんと勉強した場合ですが。

ちなみに私は母国語(日本語)の文法はほとんどわかりませんが、**外国語である英語の文法は英語のネイティブよりはるかに知っている**という自信があります。なぜなら徹底的に勉強したからです。

さて、ここでまた逆に(つまり、元に戻って)考えて見ましょう。英語のネイティブが英語の文法を知っているかどうかということでしたね。

答えは「彼らは英語の文法を知らない」です。今、日本人は日本語の文法をあまり知らないことを説明しました。言い換えると、(日本語の)ネイティブは母語(日本語)の文法を知らないということになります。

これを英語に当てはめれば必然的に(英語の)ネイティブは母語(英語)の文法を知らないということになります。日本人が日本語の文法を知らないでも日本語を話せるように、彼ら(英語のネイティブ)は英語の文法を知らなくても英語が話せるのです。

そして、日本人が日本語の文法を知らないように、**アメリカ人、イギリス人などの英語ネイティブは英語の文法を知らない**のです。「文法はノンネイティブのためにある」と言ってもいい位なのです。

余談

かつてアメリカの某州から日本に来て瞬く間にアイドルになった私より少し年下のバイリンガル歌手がいました。その彼女は東京千代田区にあるミッション系某有名大学に進学したのですが、ある英語の授業で文法に関する質問をされたそうです。答えはごく簡単に「関係代名詞」。日本では中学生でも知っています。

ところが彼女はこれがわからない。答えに窮して「文法的に何というか知りませんが、文の意味はわかります」とだけ答えたのです。普通こういう話を聞けば驚くのですが、これも「逆に考えれば」納得できます。

我々が日本語の文のある一部の語を指されて「これ文法的には何になりますか？」と誰かに聞かれて「形容動詞」だと答えられる人がどの位いるのでしょうか。

日本語のネイティブである日本人がこんなことも知らないのかと日本語を一生懸命勉強しているある外国大学の日本語クラスの生徒は驚くことでしょう。

何しろ、彼らは日本語をこよなく愛していて「(日本語) ネイティブの文法」「(日本語) ネイティブはこうは言わない」「その日本語(日本語の) ネイティブに笑われます」といった無数のネイティブ本を**夜な夜な**、読み漁り、いつしか(日本語の) ネイティブのように日本語を自在に使えるようになるという(非現実的な)目標に向かって日夜励んでいるのです。

彼らにとって(日本語の) ネイティブはほとんど**現人神**(あらひとがみ)のような存在です。その(日本語の) ネイティブが日本語の文法をろくに知らないことを知ったならばさぞかし驚き、また落胆することでしょう。でもこれを読んでいるみなさんはもう驚きませんよね？

そう、実は(何語であってもその言語の) **ネイティブは文法を知らない**のですから。

ネイティブより辞書と検索サイト

ネイティブもよく間違えることを説明しました。ではだれに聞いたらいいのでしょうか。答えは辞書と検索サイトです。ネイティブよりずっと当てになり、ほとんどの疑問はこれで解決します。

まず、辞典について説明します。当然ですが、辞典は非常に信頼性の高いものです。単語の意味はもちろんですが、文法や語法についても大変有益な情報を入手することができます。

日本人が知っている日本語は全体の一部であるように、英語ネイティ

ブの知っている英語も全体の一部です。我々が知らない日本語を辞典で調べるように彼らも知らない英語を辞典で調べます。従って、例えば単語の意味がわからないならば**ネイティブに聞くより辞典に聞いたほうが早いし確実**です。

辞典というのはその道の専門家が**大勢集まり慎重に慎重を期して作る**のですから、いかな一人の天才よりもはるかに優れたものであることは疑う余地がありません。

文法について例えばネイティブに質問しても、怪しいことはすでに説明したとおりで、これについても辞典は頼りになります。語法もそうです。このように非常に**重宝な辞典**ですが、**弱点**があります。

それは更新するのが遅いので新しい単語が出ていない場合があることです。例えば数年前にゲノムという言葉が広く使われるようになった時に(紙の)辞典には載っていないことがありました。

今はもう認知されてそういうことはないでしょうが、このように遅いという欠点があります。もうひとつは、紙面の関係上すべての例文を載せることができないことです。

例えばスピーキング(あるいはライティング)の時にある表現が実際に使われているかどうか調べようとしても辞典ではわからないことがままあります。この二つが辞典の欠点です。このような時に強い味方になってくれるのが検索サイトなのです。

ではもう少し具体的に見ていきましょう。例えばonly really という表現はいいのでしょうか?いくつかの辞典で調べてもありません。only tooなら載っています。ではこれは間違いでしょうか?いえ、まだわかりません。辞典に載っていないからといって、それが間違いとは限らないのです。そこで検索サイトでonly reallyを打ち込んでみました。

すると、たくさん出てきます。辞典にはまったくなかったのに。もしやと思ってあまり使わないロングマン英英辞典を見てもなかったのに。こうしてこのonly reallyが実際に使われている表現だとわかったので

す。意味はどうわかるかというところはもうその文脈から判断するしかありません。only reallyについてはreallyを強調しているだけだと判断できました。

このようにすれば、辞典でもわからない疑問の答えがほとんど見つかります。ただ、ひとつ注意したいのは検索サイトに載っていれば正しいとも、載ってなければ間違いとも断定はできないことです。載っていてもそれが間違っただけの可能性もあるわけですが、それは**HPやあるいは新聞に書いてあることがすべて正しいとは限らず**、間違いの可能性もあるのと同じことです。

逆に載っていないだけでも、たまたまそういう表現のHPがないだけで、実際には使われている可能性もあるわけですが。こういうことに留意した上でなら、検索サイトは100万の援軍に匹敵します。

私はネイティブがいなくてもまったく困りませんが検索サイトがないと大変困ったことになってしまいます。ありがとう、検索サイト！

「ネイティブに通じる英語」は幻想

よく「ネイティブに通じる英語」という言い方がされますが、これはおかしいことだと思います。なぜなら「ネイティブに通じない英語」というのはありえないからです。もっと正確に言いますと「**ノンネイティブには通じてでもネイティブには通じない英語はない**」ということです。わかりやすくするためにこのノンネイティブを日本人としましょう。

日本人には通じた英語がネイティブには通じなかった、というのは一部の例外を除いてありえない話だと思います。

この例外と言うのは和製英語で例えば「彼はイケメンだ」などと英語でやっても通じるわけではありません。この和製英語の弊害については別の章で記します。

さて、この「通じる」「通じない」という言葉の意味をきちんと考えて

みましよう。これはこちらの話す英語を日本人は理解したが、ネイティブは理解できなかった、という意味です。こういうことがありうるのでしょうか？

私はないと思います。なぜなら、リスニング能力はネイティブのほうが優れているからです。こちらの話す英語を相手が理解できる、というのは相手からすると、「聞いて理解できる」ということになるはずです。

日本人には「聞いて理解」できたがネイティブには出来なかったというのであれば、日本人の「聞いて理解する」能力のほうがネイティブよりも高いということになります。そういうことは絶対にありえないことです。前の項で逆の立場で考えると言いました。そうしてみましよう。

例えば、私とアメリカ人A、アメリカ人Bがいたとします。この三人で日本語で会話をしているとします。アメリカ人Aの話すあまり上手でない日本語を私は聞いてわからないが、アメリカ人Bは聞いて理解しているということはあるのでしょうか？

実際にやったことがないので、断定はできませんが、そういうことはないはず。これはリスニングの問題です。

日本人である私の日本語に対するリスニング能力が、外国人であるアメリカ人Bのそれより劣るとは思えないのです。テレビなどで外国人が大勢集まって日本人司会者（例えば、さんまさんとか）とやりとりをするのを見たことがあるでしょう。

人によってはかなり変な日本語（失礼）の人もいますが、司会者もそして視聴者もきちんと理解できているはず。日本語のネイティブである我々日本人の日本語の能力は大変なものです。

その能力をもって、あの外国人はこう（間違っ）言ったが、おそらく本当はこう言いたいのだろう、などと相手の足りないところを補ってそれを理解する能力を持っているのです。

これが可能なのは日本語のネイティブだからであって、この変な日本語を日本語のネイティブである日本人は理解できないが、ノンネイティブ

ブである外国人は理解できるというようなことはまず絶対にはいはずで、その逆つまり、変な日本語を外国人は理解できないが日本人は（補って）理解できるということはあっても。

「ネイティブに通じる英語」というのは商業上のキャッチフレーズでしかありません。「ネイティブに通じる英語」かどうか気にする必要はまったくありません。「通じる英語」なら相手が誰であっても通じますし、ネイティブなら一層通じるのです。

「ネイティブの生きた英語」も幻想

よくナチュラルな英語、あるいは生きた英語、本場の英語などといった一見もつともな、魅惑的なキャッチフレーズを使った広告を見かけます。しかし、これらはまったくナンセンスです。仮に「生きた英語」というものがあれば当然「死んだ英語」もあるはずで、これはどういう英語なのでしょう？

シェークスピアの時代の英語などであれば、現在使われていないので、そういう意味では「死んだ英語」とすることもできるかもしれません。

しかし、こういう言い回しをする場合そのほとんどは「学校で教えられている実際の会話では役立たない(受験)英語」という意味合いである場合がほとんどでしょう。

しかし、私の話す英語はだいぶ前に学校で習った英語ですが、使えないなどということはまったくありません。それどころか大いに役立っています。

また今、学校で教えられている英語もシェークスピアの時代の英語などではなく、あくまでも現代の英語なのです。死んだ（もう使われなくなった）英語などでは絶対にありません。もう一つ、「ナチュラルな英語」についても考えてみましょう。一体ナチュラルな英語とはどこで使われている英語なのでしょう？アメリカでしょうか？イギリスでしょ

うか？仮にアメリカだとしたら、あの広い国のどこで話されている英語でしょうか？仮にニューヨークあたりだとしてもどの年代のどのような社会的階層に属している人の話す英語なのでしょう？

このように考えるとこれが「ナチュラルな英語だ」などと**絶対に言えない**のです。つまりある人にとっては「ナチュラルな英語」であっても他の人にとってはそうではないのです。

分かりやすいのがアメリカとイギリス英語の違いで、アメリカ英語はアメリカ人には「ナチュラルな英語」でしょうが、イギリス人にはそうではないのです。さらにすでに述べたようにアメリカのある人々にはナチュラルでも別の人々にはそうではないのです。

繰り返しますが例えばアメリカのある人々の英語を「ナチュラルな英語」として仮に百パーセントマスターしたとしても、別の人々からは「君の英語はナチュラルではない」と言われるということです。

だから「ナチュラルな英語」にこだわっても仕方がないのです。後に詳しく述べますが「**ナチュラルな英語**」などではなく、「**正しい英語**」を話せば、このように右往左往することはありません。

話はそれますが、私は沖縄で生まれ育ちました。ご存知のように沖縄には米兵が多く、米兵と結婚する女性も少なくありません。私のいともグレーンという米兵と結婚しました(離婚も)。

その彼とは仲がよくいっしょにドライブに行ったものですが、彼は一度オーストラリアに駐留したことがあると言っていました。彼はオーストラリア人の英語はよくわからなかったとも言っていました(笑)。確かにオーストラリア英語は癖が強く、例外なのかもしれませんがそれでもこのように同じ英語でも違う部分が結構あるのです。では一体何を基準にすれば、どのような英語を話せば通じるのでしょうか？

ずばりそれは生きた英語などといったあいまいなものではなく**標準的な英語**でしょう。地域などは違っても英語が英語である以上必ず共通するところはあるはずで無論共通する部分の方が多いのです。

この共通する部分とは文法なのです(若干の違いはありますが)。したがって**文法的に正しければ意味が通じる**ことになります。実際のスピーキングでは文法的に完璧に正しいというのはまず不可能ですが、それでも**ある程度は正しく話す**ことを心がけるべきです。あまりに不正確だと相手に伝わらない可能性があるからです。

英作文をする時でもナチュラルな英語などというあいまいなものを目標にするのではなく文法的に正確な文章を心がけるべきです。そうすればきちんと意味が伝わります。ちなみに私個人はこれまで結構外国人(ネイティブ、ノンネイティブを問わず)と英語でやりとりをしたことがあります。私の英語がわからないというようなことはありませんでした。

それは私が**生きた英語**などというあいまいなものではなく(文法的に)正しい英語を話していたからなのです。

ネイティブは英作文の指導が出来ない

ネイティブによる英作文添削という広告が結構あります。残念ながら日本人による英作文添削という広告はないのではないのでしょうか。少なくとも見たことがありません。その理由は「英作文はネイティブに限る」と考える学習者が多いからですが、これはまったく誤った考えです。詳しく説明しましょう。文章(何語で書いてあっても)の誤りには次の3種類が存在します。

- ①語彙の誤り
- ②論理の誤り
- ③文法の誤り

①語彙の誤り

これは特に問題はないでしょう。赤線を引いて正しい単語、語句を指

摘すればいいだけです。ネイティブでもノンネイティブでもさほど変わらないでしょう。

②論理の誤り

論理の誤りを指摘できるのは論理がわかる人間だけです。ネイティブかどうかはまったく無関係です。

論理とは何か

最近論理と言う言葉をよく耳にします。論理とは何でしょうか？
次の日本語をどう思いますか？

私は昨年沖縄に行った。昨日雨が降った。

「？」っていう感じでしょう。なぜそう感じるかと言えば論理になっていないからです。「沖縄に行った」と「昨日雨が降った」とには何の関係もないのです。それをこうやっていっしょに並べるからおかしなことになるのです。

これは少し極端な例ですが、論理とは例えばこういうことです。ではもう少し込み入った論理を見て見ましょう。次の文には論理的におかしな部分があります。どこでしょうか。

私は三十八年間ある会社に勤めていましたが二年前に退職しました。私は多くのリーダーと共に仕事をし、また同時に私自身リーダーとしても働きました。その経験から私が考えるリーダーの資質とはおよそ以下のようなものです。まず第一に、責任ということです。私は日本企業では責任感が最も重要であると考えます。しかし、状況が悪くなると、多くのリーダーは責任を取ることを回避しがります。そして、職場での

調和を優先するために人々はお互いを非難するのをよしとしません。

第二に… 略

作者は責任感が重要であると主張しています。第2文まではいいのです。問題は第三文「職場での調和を優先するために人々はお互いを非難するのをよしとしません。」です。職場での調和を優先することやお互いを非難するのをよしとしないことは責任(感)とは何の関係もないはずです。

何の関係もないので、前の文「責任逃れをする」とつながらない(論理の飛躍)し、またこの段落の中にこれを入れるのもおかしいということになるのです。

ではもしこの文章が他の言語、例えば英語で書いてあるとしたらどうでしょうか? 日本語ではおかしくても英語なら問題ないということになるでしょうか?

英訳を見るまでもありません。**日本語でおかしいのならそれを何語に(スワヒリ語でも何でも)変換したところで、おかしな文章にしかありません。**1足す1は3という日本語を英語に直せばやはりおかしなことになります。1足す1は2であることは何語であっても変わらないからです。

これは少し大げさに聞こえるかもしれませんが、言ってみれば論理です。そしてある言語で表されたある論理がおかしい(1足す1は3のような)のであればそれは別の言語で表されたとしてもおかしいし、逆にある言語で表された論理が正しいのであれば、それをどの言語に変換したとしても正しい- 言うなれば「**論理は言語を選ばない**」- のです。

作文を添削する場合、このような論理の誤りを指摘しなくてはなりません。日本語で書かれていても論理がおかしいことに気づかない日本語のネイティブ(日本人)が決して少なくないように、**英語で書かれた文章の論理がおかしいことに気づかない英語のネイティブも決して少なく**

いのです。

もちろん、きちんと勉強しているネイティブはわかるし、指摘できるでしょう。英語でなら。ネイティブをあたかも現人神であるかのように思う日本人が多いように思いますが、ネイティブとは裏を返せばモノリソナルでしかありません。英語しかできないのです。

中には例えばフランス語が出来る人もいるでしょうが、英語圏の人が外国語を学ぶのは極めてまれなケースでしかなく、仮にフランス語か何か出来たとしても日本人にはまったくありがたくありません。

と言うわけで、論理がわかるネイティブは少ないし、またわかっても英語での説明なので日本人にはわかりづらいのです。論理のわかる日本人の英語の先生がベストです。

③文法の誤り

Aネイティブは文法を知らない

これについてはすでに解説したとおりです

B英語で文法説明されてもわからない

ほとんどの人は英文法を英語ではなく日本語で習ったはずですが。そうでないとわからないからです。文法というのはわかりにくいものです（日本語の文法は英語の文法より難しい）。日本語で説明されてもわかりにくい英文法をわざわざ英語で理解しようとする人はいないでしょう。

添削するネイティブが文法をきちんと勉強して説明できるとしても英語でしか説明できないのですから、それを読んでも理解できないはずですが。もしそれが理解できるなら、相当な英語力の持ち主でそもそも添削を受けていないはずですが。ですから、英文法は日本語で説明するに限るのです。日本語でも難しいものなら英語で説明されては余計わかりません。

実はネイティブも発音がわからない

ご存知のとおり、英語ではスペルと発音が必ずしも一致しません。初めて見る単語の場合、大体こうだろうと見当はついても推測の域をでないのです。かねがね疑問に思っていたのであるオーストラリア人に聞いてみたことがあります。

「私はある単語を初めて見た場合、発音を知るには辞典を引いて発音記号を調べるが、あなたはどうしますか」と。

その答えは「だいたい見当はつくが、正確に知ろうとする場合は辞典を引いて発音記号を調べる」でした。やはり思っていたように彼らも発音は苦勞するのだなと。英英辞典を引けばわかるように、単語には発音記号がしっかり載っています(文字と音声が一致する日本語辞典とは違って)。英英辞典は言うまでもなく、ネイティブが使用するものです。

子供の頃から英語を使っている人にこうして記号でもって発音の仕方を教えているわけなのです。ですから、我々ノンネイティブが単語を覚える場合、発音記号をしっかりとチェックするのはなおさら当然のことなのです。

驚く人も多いでしょうが、実はネイティブはスペルをよく間違えるのです。日本人なら漢字の間違いはあってもひらがなを間違えることはないでしょう。英語には漢字に相当するものはありません。

ひらがな(アルファベット)だけです。そのひらがな(アルファベット)を間違うのですから、ある意味これは驚くべきことでしょう。もし日本人がひらがな間違えることに例えて考えてみれば。

しかし、これはよくあることなのです。例えば数年前にアメリカの大統領がある小学校を訪れてトマトのスペルをtomatoeと書いたらすかさず子供から「違うよ、tomatoだよ。eはいらないよ」とツッコミをいられ、ボケる余裕もなしに赤っ恥をかかされたことがありました。

「トウ」と発音するスペルはtotal などにある to と toastなどにあるto

a そしてtoe の3つがあるのです。そのために英語のネイティブでも、音声だけでトウメイトウ(= トマト)を覚えた場合、このようにスペルを間違ふ可能性(2 \ 3)があるということになります。

英語ではスペルからある程度、発音を推測することは出来るのですが、例外も多いので、こういう方法(フォニックスと呼ばれますが)で、英単語(とその発音)を覚えるのはあまりお奨めできません。その単語の発音をきちんと覚えることはできないからです。

きちんと発音記号に照らし合わせて、覚えていけば大体の発音の仕方がわかってきますし、将来大統領になった時に小学生からツッコミを入れられることもないでしょう。発音も上手になりたいのなら、面倒くさくてもそうしてください。私は中学からずっとそうしてきました(英語が好きだったので)。だから発音がいいと言われるのです。

絶対に必要な日本語による説明

一切の日本語禁止という英会話学校や講習会があるようです。一見効率的に思えるかも知れませんが私はそうは思いません。一般的に英会話を習う人は英語の苦手な人です(得意なら習う必要はないはずです)。

苦手な人に英語を理解させるには絶対に日本語による説明が必要なのです。これは英語を教えたことのある人なら当然理解していることです。

いくら会話とはいっても決まりごと(月並みに言えば文法)がありません。最低限の文法的理解がなければ支離滅裂なものになってしまつて本人だけはわかつて(笑)、相手にはわからないでしょう。文法というものには日本語で習つてもわかりづらいものです。英語なら尚更でしょう。

では文法は得意な人はどうでしょうか。同じ事です。例えばある英単語が出てきたとしましょう。やや難解なので何度聞いてもその意味を推理できない。

こういう場合は日本語でその意味を教えてあげれば相手は「ああ、な

るほど」と理解するでしょう。早速その単語を使おうとするかもしれませんが。日本語による説明が必要な一例です。

もっとあります。英語で何かを伝えようと思っても言葉が出て来ない事があります。このような時、単語がわからないのではなく相手に伝えようとする考えそのものがあやふやで、従って英語でも日本語でも何をいったらいいかわからない場合が結構あるのです。

このような時にはまず日本語で説明して、相手に自分の考えを日本語でまとめさせてからそれを今度は英語で表現させるといった指導が必要になります。

ややこしい問題についていくら英語で説明してもわかりにくいどころか、却って混乱させる場合もあるのですから、こういう時は遠慮なく日本語を使う方がより能率的です。

ネイティブを上回るノンネイティブ①

ネイティブ崇拝の強いこの国で、ネイティブよりも英文を読む力がある日本人がいる、と聞いたならほとんどの人は信じないでしょうが、これは間違いの無い事実です。例によって「逆から考えて」みましょう。

経済って難しいですね。私なども新聞読んでいてほとんど意味がわかりません(笑)。日本人だから漢字も読めるし、音読もできますが肝心の中身がわからない。さて、ここにリチャード G というアメリカ人がいます。

彼は映画俳優の仕事をしていて、敬虔な仏教徒… とは言わないんですよ。不思議ですね、この敬虔という形容詞がキリスト教限定とは。もとい！彼は信心深い仏教徒でもあります。

彼は大の日本通で日本語も出来てなんと日本経済新聞の経済欄を毎日読んでいます。あ、言い忘れました。彼は大学で経済を学んだのです。日本語はその後猛勉強しました。以下はこれに関連した某大学でのシユ

ミレーションです。

A教授：そこの学生！次の質問に答えたまえ。間違えたら留年だ。普通の日本人で、もちろん新聞は読めるが、経済がわからないので経済欄は読めない島袋さんと、このリチャード・Gさんではどちらが日本語で書かれた経済記事を読む力があるだろうか？

学生：島袋さんに決っています。彼は日本語のネイティブだから日本の新聞を読むことなら外国人に負けるはずがない。

A教授：島袋さんは経済オンチで経済面が読めないと質問の中にあるだろう！何を聞いたのかね、君は！留年だ！

学生：しまった！（日本語の）ネイティブだからノンネイティブには負けるはずがないというネイティブ信仰の悪い癖が出てしまった！ご勘弁を、きょっ、教授一っ！

…どうでしょうか、このやり取り。多くの方は笑ってばかりはいられないはずです。なぜなら多くの方がこれに近い考えを持っているのですから…。

ここに挙げたようなことは非現実的と思われるかもしれませんが、実はこういう人は結構存在します。夜十一時にワールドビジネスサテライトというテレビ東京の人気番組があります。

この番組が人気あるのは司会の小谷真生子さんの知的美貌によるところが大きいと勝手に解釈していますが、それはともかく、この番組に出演するモルガン・スタンレー証券チーフエコノミストのロバート・フェルドマン氏 がその一人です。

氏の日本語会話力はかなりのものですが、それにもましてすごいのが

日本語で書かれた日本経済新聞を読めるということです。なぜそんな離れ業がと思うかも知れませんが、離れ業でも何でもありません。まず氏は経済の専門家であり、読むどころか書くほどの豊富な知識があること。そしてもうひとつは氏が日本語の勉強を一生懸命（おそらく）やったことです。

そしてこのような人が様々な分野でいるのです。例えばIT。ITの専門家でも日本語も学んだならITの専門的な知識のない普通の人には読めない日本語で書かれたIT関連の本を読んで理解できるはずで、医学もそう、あらゆる分野でこういうことが起きえるのです。

では、さらに逆、つまり元通りに考えてみましょう。経済に詳しく、英語も得意な田中さんと経済がまったくわからないイギリス人のトムではどちらが経済に関する英文を読む能力に優れているか？答えは明白です。

このようにネイティブだからノンネイティブより優れているとは限らないのです。その逆が十分ありうるという真理にもっと多くの人が気づくべきです。ネイティブ崇拜の呪縛から逃れるためにも。さらに突っ込んでどのような状況でノンネイティブがネイティブを上回るか詳しく検証しましょう。

ネイティブを上回るノンネイティブ②

リーディングについてはもう説明済みですのでそれ以外を。

スピーキング

普通のスピーキングでは絶対にネイティブにはかないません。しかし①知識を要するスピーキングと②論理的スピーキングとなると状況が一変します。

①知識を要するスピーキング

これは先ほどの説明と同じ理屈になります。経済がわからないのであれば、母語であってもそれについて話すことはできないはずです。例えば計量経済学や時系列分析について日本語で話せるのでしょうか。話せないはずです、普通は。私も話せません。

今、ネットで「経済理論」で検索したら見つかった言葉で初耳です。その解説を少し読んだだけでは意味すらわからないでしょう。話すどころではありません。でも私の友人で中央線沿いにある某有名国立H大学経済学部を出た杉野実さんならこれについて話せるはずです。

杉野さんは英語も出来るので、英語でも話せるでしょう。経済を知らないイギリス人のボブさんは話せなくても。いかなネイティブといえども知らなければ話せないのです。ちなみに社会評論社からエンハンスメント論争という翻訳本を出しました。

かなり難しい内容（自然科学）ですが、杉野さんは高度な国語力と多少の科学的知識があり、わからないことはネットで調べることで、翻訳できたのです。

②論理的スピーキング

社会問題などに関するスピーチがそのさいたる例です。例えば「日本の格差問題について2、3分間日本語でスピーチしてくれ」と言われたらどうでしょうか。これなら先ほどの計量経済学などとは違って知らないということはないはずです。みんなとりあえずは知っているはずです。だから「知らない」というのは言い訳にはなりません。

どうでしょうか、上手にスピーチできるでしょうか？ほとんどの人は出来ないはずです。もちろん、まったく出来ないということはありませんが、それをこの時間内（あるいは制限時間なくても）に**理路整然と話すことのできる人の割合は2割もない**のではないのでしょうか。

逆に日本語と日本の社会についてしっかり勉強してかつ自分の意見を論理的に話す訓練をしている外国人のほうが上手に話せるはずです。そういう訓練を普段受けているのですから。

このように、論理的に話すというのは訓練を受けなければ、母語であっても困難で、そういう訓練を受けた外国人よりも下手だというのはむしろ当然のことです。

英語が出来て、論理性を鍛えた佐藤さんの英語によるスピーチ（例えば脳死問題）のほうが、話し方が下手で説明していることの意味がよくわからない(笑)イギリス人ケリーのスピーチよりも上手いのは当然のことなのです。論理的スピーキングにおいて、ノンネイティブがネイティブを凌駕するのは十分ありえるのです。

ライティング

日本語のネイティブ（つまり日本人）でありながら、日本語で文章を書くのが苦手という人が結構います。いやむしろそのほうが多いはずです。特に論説文は。普段このような文（論説文）を書く習慣がないので当然です。

これもこれまでの説明どおり、論理的な文章（いや、別に小説でもいいですが）を書く練習をした日本語の出来る外国人のほうがきちんとした文章の書けない日本人よりも上手に書けるはずです。漢字という大きなハンディを乗り越えられれば。

その逆のほうがもっと簡単でしょう。このようなハンディがないのですから。つまり英語が出来、かつ文章を書く練習をした日本人のほうが、作文したことがあまりない英語ネイティブよりも英作文が上手いということです。作文における間違いにはすでに説明したように

①語彙の間違い ②文法の間違い ③論理の間違い
の3種類が存在します。単語はまだしも、文法的に、そして論理的にも正しい文章を書くのは母語であっても難しいのです。このことは「ネイ

ティブは英作文の指導が出来ない」の項で説明したとおりです。

ところが、ノンネイティブであってもしっかり勉強すれば、文法や論理の正確さにおいて(超人的な努力をすれば語彙においても)ネイティブを上回る人が存在します。

例えば、英文ライター。NHKやジャパントゥタイムズなどで国内のニュースを書いているのは実は日本人なのです。日本語が出来なければ、通信社からのニュースやあるいは自分で取材してつかんだネタを英語にできないからです。ネイティブもちろん、いますがそれはチェックしているだけです。

ですからあの記事は基本的に日本人が書いた英文なのです。驚きましたか? 下手なネイティブよりも一生懸命勉強したノンネイティブ、日本人のほうが正しい英文を書けるという事実。

余談ですが、英字新聞などでは文法的、語彙的に間違った英文が見受けられます。もちろん、日本人の書いた英文だけではありません。ネイティブの書いた英文にも間違いが見受けられるのです。

しかし、このように英語ネイティブが英語を間違えることをおかしいと思っははいけません。よくあることなのですから。

それは日本語のネイティブである日本人が日本語をよく間違えるのと同じことでしかありません。ネイティブだから間違はずはないというネイティブ信仰はもうやめましょう。

帰国子女信仰もやめなさい

帰国子女というと「英語がぺらぺらで…」と羨望のまなざしで見る日本人(特に英語好きな人)が多いように思いますが、帰国子女を多く見てきてかつスピーキングの指導もしてきた私にはそういう感覚はありません。もちろんすべての帰国子女に会ったわけではないのですが、彼らの多くに共通することがあります。

それは文法がわかっていない、ということです。したがって、彼らの話す英語は文法的に間違っている場合が多く、作文をやらせても文法上の誤りが多く見受けられます。これはなぜなのでしょう？

それはバイリンガル教育の難しさと滞在期間にその原因があります。帰国子女の場合、一般的に何十年も海外で生活したような人はごく少数です。これは彼らの海外滞在は親の仕事上の都合であり、何十年も海外赴任をさせる企業はないという理由によります。数年ないしせいぜい十年程度英語圏の国に滞在したからと言って、英語をマスターできるものなのでしょうか？

できるわけはありません。言葉の習得というのはそれほど簡単なものではありません。数年程度の学習で完璧にその言語を操れるようになるというのは一部の天才を除けば絶対にありえない話です。ましてや、2ヶ国語を同時に学習する場合はより一層困難になってきます。英語圏で暮らして英語を使用する日本人子弟はほぼ例外なく日本語の学習もしているはずですが。

そうでないと、帰国したときに「自分の国なのに言葉が通じない」という大変な状況が待ち構えていることになるからです。そのために彼らは英語と日本語という二つの言語を学んでいるわけですが、そのために大きな負担がかかっている、問題を生じているという事はほとんどの日本人は知らないと思います。

彼らは日本語も英語も話しますが、彼らの日本語力は普通の日本人より低く、英語は英米人より低いというのが普通です。彼らの英語はすでに話したように、文法上の間違いがかなり見受けられます。

帰国子女の多くは進学の問題でまだ大人になる前に帰国するので、彼らが海外滞在中で学ぶ英語はフォーマルなそれではなく、カジュアルなものであるのが普通です。学校生活などでのカジュアルな場面では文法的におかしかりょうとなんだらうととにかく意味が通じれば通用しますし、また相手も「外国語として英語を話しているんだから」と大目に見てく

れます。すると、きちんとした正しい英語を習得する機会なしに日本へ帰ることになるわけです。

もちろん、中にはその後一生懸命勉強して高度な英語力、日本語力を身につける人もいますが、多くの場合は「誤った英語」を修正する機会がないまま帰国生活を送ることになるようです。ですからこういう「普通」の帰国子女の英語をお手本とするべきではありません。

私はなにも帰国子女を悪く言いたくてこういうことを書いているわけではないので(笑) 彼らの長所も触れておくと、彼らはすらすら話します。次章でも触れますが、英語が上手い下手の基準のひとつが滑らかさですので、この点彼らは上手と言う事ができます。この点は彼ら为目标にしていいかもしれませんが、早口すぎることがあるので、注意が必要です。しゃべる速度については、次章の「かつこいい発音より聞きやすい発音」の項でくわしく説明します。

文法の重要性について

この章の最後で文法の重要性についてお話ししましょう。英語学習において、文法の理解は非常に重要なものです。極論を言えば、文法をやればあとは単語を覚えるだけといってもいいくらいです。

英語を子供のころからやっている英米人はセンテンスごと丸暗記しているので、特に文法の勉強をしなくても文法が身につけているのですが、我々普通の日本人の場合はこうはいきません。ですから意識して文法を学習する必要があります。でなければ絶対に文法は身につけません。では文法は何の役にたつのでしょうか？もし文法を学習しないとするとどうなるのでしょうか？

答えは「ごく簡単な英語の読み書き話ししかできなくなる」です。無理にやろうとすると大混乱を引き起こすことになります。簡単な例をあげましょう。日本語では「うちへ帰る」と動詞だけの場合、話している

本人が、ということになりますよね。ところが英語では主語のない動詞だけの文は命令を表します。Go home. なら相手に向かって「うちへ帰れ」と命令していることになります。英文法を知らないで日本語と同じように使った場合、大変なことになってしまいます。

実は私自身、こういう失敗をした経験があります。あるところで「もうお家へ帰るから」と言おうと思ってGo home. と言ってしまったのです。相手は怪訝な顔をしていましたが、少し経ってから間違いに気づいた私は慌てて I go home. と言いなおしました。冷や汗ものでしたが、相手はいい人であつ私のほうがお客さんという立場だったので、大事にはなりませんでしたが、仮に相手が職場の恐い上司かなにかだったとしたら、私の首が飛ぶようなことになったかもしれません(笑)。

こういう簡単な文でも文法を知らなければ大変なことになりかねないので、もっと込み入った文ではさらに大変なことが発生する可能性があります。もちろん、ちょっと難しい英文はもう読めませんし、英作文もごく簡単なものしかできません。会話もごく簡単なものだけです。

ですから文法の勉強もきちんとやってください。必ず役に立ちますから。

第2章

日本人に必要なのは国際英語

間違いを気にしては永遠に英語は話せない

私が東京の大学に通っていたときにたまたま英語を話す機会が訪れ、自分でも驚くくらい上手くいったことはすでに説明しました。しかし、実はその前の高校時代にほとんど話せなくて少々自信を喪失した事件がありました。それについてお話します。

あれは忘れもしない高校二年生のときです。クラスの女子生徒のいとこ姉妹がアメリカから沖縄へ遊びにきていて、うちの高校でしばらくの間一緒に授業を受けていました。そんなある日の放課後、彼女達も交えて椅子取りゲームのようなことをやることになりました。彼女達は日本語がわからないので、ある女子生徒が英語の成績がいい私に彼女達に説明して欲しいと頼んだのです。

思いもよらない事態に少々不意を突かれた格好の私はあせってしまって、ほとんど何も話すことができません。そうこうするうちに、その女子生徒は片言の英語と身振り手振りで彼女達に説明すると、結構意味が通じたようで、ゲーム開始！となったのです。

ああいうやり方でも意味が通じたことが少々意外だったことと、それ以上に「学校の英語の成績はいいのに、話せない！」というトラウマのようなものがその後しばらく私の心に残ることになりました。

「実戦英語」に興味があるという別のクラスで友人のG君がハワイへ英会話の習得の目的で留学することを聞かされたときには、「僕もそうしないとだめかな？」などと思ったりもしました。

それから数年経って、東京での英会話大成功事件に遭遇して「学校で一生懸命勉強したことは無駄ではなかった」のを喜んだことは何度も話した通りです。

しかしそれではなぜ、高校のときは話せなかったのでしょうか？このときでも簡単な会話なら十分にこなせるだけの英語力は絶対にあったはずなのです。答えをいみましょう。それは間違っただけではないという考

えがあったからなのです。

私は読むのも好きでしたが、文法も好きでこれについては学年で一番という自信がありました。何しろ中学の頃から、英語の教科書の内容を完全に理解しようと努めてきていて、文法についてわからないことはない（もちろん教科書の範囲ですが）という状態でした。文法おたくだったとも言えるかもしれません。文法的に完璧であろうとしていたのです。

高2のときに初めて「実戦」で英語を使う場面になったときはこれが災いしました。間違っではいけない、恥であるという誤った妙なプライドみたいなものがあり、それで英語がまったく口から出てこなかったのです。

大学時代の例の事件のときにはなぜか「間違っではいけない」という意識がなく、思ったことがすらすら口から出てきて、私自身がびっくりしました（実はこのとき高校時代の沖縄の友人も一緒にいて、「いつそんなに上手くなったの？」と驚いていましたが）。

このときなぜ「肩の力が抜けて」いて上手くいったのかと言えば、しばらく英語から離れていたからだと思います。大学に入るまでは英語だけは一生懸命やりましたが、入ってからは別のことに熱中していて、また学部も英語とは無関係だったので、英語の勉強はほとんどやっていなかったのです。それで、「間違っではいけない」という一種の強迫観念から開放されて、気楽に話せたのでしょう。

学校の英語は得意だが話せない、という人の中にはかつての私のような人が多いと思います。子供の頃から英語をやっていない普通の日本人が間違わずに英語を話すというのは絶対に無理な話です。そんなこと気にしていたら、永遠に英語は話せません。肩の力を抜いて話してみてください。思った以上に上手に英語を話せるはずですよ。

英語の上手なノンネイティブを目指す

ネイティブのように話すことを目標としている人がいるのには驚きます。なぜなら**可能性がゼロ**だからです。それは日本に長年住んでいてかなり日本語の上手な外国人の日本語を考えるとわかることです。彼らは日本人のように話せているのでしょうか？そうではないはずです。どんなに上手ではあってもやはり限界があるはずですよ。

しかし、だからと言って、日本人のほうが偉いということではもちろんありません。間違いがあったとしても、日本語を話せるようになるには努力が必要ですし、また日本に対して好意をもってくれているに違いないからです。そんな彼らには敬意を払う必要があると思います。

これと同様に、英語を外国語として学ぶごく普通の日本人が英語を話せるというのはたいしたことなのです。例えばその英語に時々間違いがあったとしても、**一ヶ国語しか話せないよりも価値があるのは当然のこと**なのです。

どんなにがんばってもネイティブのように話せません（話せる必要もない）。ですから、それをとがめることがあってはならないし、またそれを恥じる必要もまったくないのです。英語が好き、は大いに結構です。しかし、実現不可能なところに目標を置いて卑屈になったり、貴重な時間を無駄にしてはなりません。我々はネイティブを目指すのではなく**英語の上手なノンネイティブを目指す**べきなのです。

英語は地域英語と国際英語の二種類

英語には二つの側面があると思っています。一つはアメリカやイギリスなどで話されているその国の母国語としての英語。もう一つは国際的な場（そこにいる人は必ずしもネイティブではない）で使われる国際共通語としての英語。我々日本人が学習すべきは国際英語の方でしょう。

これからますます国際化が進むであろうから英語はますます重要になるなどといったことをよく耳にしますがもしそうだとすれば学ぶべきは国際英語の方でしょう。国際化とはアメリカ化、イギリス化ではないのですから。

「こういう場合アメリカ人はこう言う」などと得意顔で言う人がいますが、こういう人は何か勘違いしていて、またなぜかこういう人に限って大して上手くないのです(失敬)。

英語のノンネイティブである日本人が学ぶべきはアメリカ英語(あるいはイギリス英語)ではなく、国際英語であるべきでしょう。**国際英語とはネイティブであってもそうでなくても通じる英語の事であまり込み入った表現を使わない、わかりやすい英語**のことです。一つ面白い話をしましょう。

今から二十数年前、まだ学生の頃、駅のホームでインド系の顔立ちをした女性から沼袋駅はどこですかと聞かれました。二つ目だったので私はIt's the next station but one. と答えたのです。このbutは御存知のように前置詞で、～を除いてという意味です。従って、一つを除けば次ということはつまり次の次、二番目の意味になるわけです。

これは受験勉強の時に覚えた表現で相手はネイティブ(御存知のようにインドでは英語は公用語です)なので知ってるだろうと思って、ちょっとしゃれた言い回しをしたのですが、見事に(今思うとあの人はパキスタンかどっかの人だったかもしれませんが)通じませんでした。私はあわててSecond, Secondと言い直して無事国際親善を果たしました。

この一件が私に教訓を与えました(少し大げさですが)。**あまりややこしい表現は使わない方がいい**という事です。考えてみれば同じ日本人でもあまり読書をしない人にちょっと難しい日本語を使えば意味が通じないことがあります。

これが英語でしかも相手がどこの国の人か分からない場合はなおさらでしょう。国際英語ではあまり込み入った表現は止めた方がいいのです。

日本人に必要なのは国際英語

このように英語にはその英語圏の国の人にとっては母国語である一方、そうでない人にとっては国際間のコミュニケーションに使用する言語、すなわち国際英語という側面があり、日本人にとって学習すべきは当然国際英語のはずです(中にはどうしてもクイーンズイングリッシュを習いたいという人もいるかもしれませんが、そういう人はそうすればいいでしょう)。

それでは国際英語はどこで学んだらいいのでしょうか？外国に行かなくてはならないのでしょうか？もちろんそういう事はありません。日本人が日本語の共通語を学ぶのに東京までわざわざ出かけなくてもいいように。

国際共通語である国際英語を学ぶためにわざわざ海外へ行く必要はまったくありません。日本にいて学べます。日本にいたほうが教材などの面でむしろ有利でしょう。

国際英語というのは例えば、アメリカのある地域で話されている英語などとは違って、「これがそうだ」というはっきりとした定義があるわけではありません。Aという国の人がBという国の人と話すときの英語、Cという国の人がDという国の人と話す時の英語、それぞれが国際英語なのです。

当然これらはすべて異なるはずですが、これが一番わかりやすいのが国連で、テレビでも議論するところをみたことがあるでしょう。ネイティブのような英語を話す人はイギリス人などのネイティブ以外いません。

フランスの代表ならフランス語なまり、日本なら日本語なまり、中国なら中国なまり、ドイツならドイツ語なまり。みーんな立派になまっています(笑)。なまっているという言い方がいやならば、音声的に日本語の影響を受けた英語、フランス語の影響を受けた英語などと表現してもいいのですが、いずれにせよこれでいいのです。

英語だからといって、苦勞してネイティブと同じように話そうとして肝心の中身がおろそかになるなどはまったくのナンセンスです。訛りがあろうとなかろうと肝心なのは意見のやり取りができる、自分の主張ができるということであって、(中身の無い) 英語をカッコよく話す事ではないはずです。

国連の会議に出席するほどの人の話す英語でさえ、そうなのですから、我々普通の人の話す英語が日本語の影響を受けた英語(カタカナ英語)であって何の不都合があるでしょうか?かっこつけても仕方ありません。英語でコミュニケーションが十分取れる英語、国際英語の習得を我々日本人は目指すべきなのです。

共通語を習いに東京へ行く？

もしある地方の子供、例えば沖縄の人が共通語を習いに東京へ行くと言い出したら、その親はどう思うでしょうか。私なら止めます。共通語はどこにいても、学べるはずだからです。そのために国語を学校や家庭で教えているわけでしょう?その国語すなわち国内共通語を学びに東京へ行かなくてはいけないというのはまったく理にかないません。

沖縄で何か問題があるとテレビでインタビューしているところを見ればわかるように、確かにアクセントは東京などとは違います。しかし、日本語であることに変わりはありません(よね?)。

福岡の人も大阪の人もやはり東京とはアクセント(使う単語も多少)が異なっています。日本全国その土地土地でアクセントが違うのですから、これは当然のことです。

英語も同じことなのです。もし私の子供が「英語を習いにイギリスへ行く」などと言ったら、絶対に反対します。英語は国際共通語なのですから、どの国にいても習うことが出来るからです。

だからこそ、英語が国際共通語になったのです。もし英語がイギリス

やアメリカに行かなくては習えないのなら国際共通語として使われることはなかったでしょう。

その国へ行かなくては習えないことがあるのなら留学もいいでしょうが、そうではなく、「英語を習いに行く」のであればまったくのナンセンスです。日本にいれば、日本語が習えるように、地球に住んでいれば地球語（国際英語）を習うことができます。

これほど英語学習の教材が豊富な日本にいて英語がモノにならないのであれば、これらのない外国へ行っても絶対にモノにならないと断言します。

フィリピン人、オーストラリア人の嘆き

いつだったか、ジャパントイムズの読書の欄で非常に共感できる投書がありました。フィリピン出身で東京在住の匿名の方です。その方が学生だったか社会人だったかは定かではありませんが、日本で英会話講師の求人に応募しても採用されないというのです。理由は出身国に対する差別と、英語になまりがあるという事です。

このなまりがあるということについて考えてみましょう。確かにフィリピンの人の英語はアメリカ人ともイギリス人ともオージーともニュージーとも異なっています。沖縄にはフィリピン人が結構いて、私も話したことがあるのでわかります。

しかし、発音を除けば彼らの英語はネイティブなのです。アメリカの曲を聴いて完全に理解できますし（スラングは別でしょうけど）、一切のよどみがなくなめらかに話します。

その投書の方は大学を出て、もちろん滑らかな英語を話すそうですが、日本では講師として採用されないというのです。これはひとえに英語学校の生徒がそういう講師を好まないということなのでしょう。これに関連してある英会話学校に勤めるオーストラリア出身の女性講師から聞いた

た話があります。

その方が言うにはオーストラリア風の英語では生徒がいやがるので、アメリカ人かイギリス人風に話すように強制されるそうなのです。オーストラリア人は当然ながらオーストラリア人としての誇りがあるわけで、まったく納得いかないのだが雇ってもらうためには仕方がないのでそうしていると話していました。

国際英語という観点からは本来、相手の英語が自分の好きな英語ではないなどと選り好みしてはならないはずなので、逆にリスニングを鍛えるチャンスのはずですが、そう考える日本人は少ないようです。先ほどのフィリピン人のケースにしても「純正でない」あるいは「なまりのある」英語に接していると移ってしまうのではないかと考える人が多いようです。

しかし、すでに説明したようにスピーキングは伝染しないのでそういうことはありえないのです。いやむしろ伝染したほうがいいと思われます。なぜならフィリピン人、オーストラリア人の英語は日本人のそれをはるかに凌駕するのですから。

上手な英語を話すには

これまで国際英語という観点から英語は通じるためにあるということを書いてきました。確かにそのとおりです。でも中には「上手いと思われる英語」を話したいという方もいるでしょう。

その方法論を記したいと思います。この方法は私自身だいぶ以前から実行していること（別に難しくありません）でもあります。まずは英語の上手さの定義から考えて見ましょう。

生きた英語、ナチュラルな英語といった言葉があまりにも氾濫しすぎているので、肝心なことを見失いがちなのですが、冷静に考えれば、スピーキングの上手さは以下の三点で決まることに異論はないでしょう。

そしてこの三点を向上させるためにはネイティブはまったく必要ないことも説明しましょう。

- ①なめらかに話せるということ
- ②文法的に正確に話せるということ
- ③音声的に正確に話せるということ

①に関して

これはとにかく量をこなすしかありません。スポーツと同じでたくさん練習する事によって早くなる(なめらかになる)のです。一般的に留学などの経験のある人の英語が流暢なのはたくさん話すからです。もちろん日本国内であっても英語をたくさん話す練習をすれば流暢に話せるようになります。

海外へ行く必要もなければ、ネイティブに練習相手になってもらう必要もまったくありません。日本の中であっても、とにかく英語をたくさん話せばいいのですから、日本人の友人に相手になってもらったり、英会話サークルへ通ったり、あるいは一人で、英語をたくさん話せばいいわけです。

英語を話すと言うのは最初のところでも言いましたが、**英単語を口頭で並べる**だけです。したがって相手はだれでもいいどころか、いなくても**これは実行できます**。これを私は**セルフスピーキング**と呼んでいて、あとで詳しく解説しますが「こんな方法があったのか!」と思うことでしょう。

②に関して

文法規則を習得してその規則に則ってスピーキングする練習をするだけです。一番いいのは練習相手に自分の文法の間違いを指摘してもらうことです。その相手は文法のわかる日本人がベストです。ネイティブで

は無理です。なぜなら、すでに説明したようにネイティブは文法を知らないのですから。

もちろん、中には知っている方もいます。しかし、日本語が使えないので、相手の日本人に日本語で説明出来ないという致命的な欠陥を持っているのです。ですから、ネイティブはこの②の訓練において役に立たないのです。

「いや、英語で文法の説明されても僕はわかるよ」と言われる方もいることでしょう。相当な実力者です。ただ残念ながらこのくらいのレベルならそれはもうプロのレベルで、そもそも英語を習いに来ているわけがないのです…

③に関して

ネイティブと話せば発音がよくなるというのは絶対にありえません。留学した人の発音はネイティブのそれと同じでしょうか？違うはずです。このことは「逆に考えて」日本で長年暮らしている日本語の上手な外国人の日本語の発音が日本人の発音とは異なることをみてもわかるはずで

す。では、何が有効かといえばそれは発音記号をマスターして発音記号と一緒に単語を覚え、なるべくその記号どおりに発音する事です。これ以外ありえません。ところがほとんどの人がこれを怠っているのです。最も有効な方法であるにもかかわらず、足元をしっかりと見ずに「ネイティブの発音」などといったフレーズに迷わされる場合が多いのです。

発音をよくするのにわざわざ外国へ行く必要も、英会話学校へ行く必要もまったくありません。③についてもネイティブの必要性はないことがこれでわかったでしょう。

さて、このように①から③まで、きちんと検証していけば、**英語が上手になるのにネイティブは役に立たないことがわかったでしょう。**

本当に上手になりたいのなら、高度な英語力を持ち、もちろん日本語

で説明できる講師についたほうがいいのです。

しかし、いつまでも習うという意識では何事も上達しません。あるレベルにまで行けば、あとは自分で自分を教える以外ないのです。そのために自分のスピーキングを録音してチェックしたりなどで、自分一人でも出来るようになります。

スピーキングの練習は一人でも可能

多くの人はスピーキングの練習は一人ではできないと思っているようです。しかし実は一人でもスピーキングの練習は十分可能なのです。私はこれをセルフスピーキングと呼んでいます。

一人で行うスピーキングの練習としては通訳の訓練に使われるシャドーイングがよく知られています。シャドーイングも一人で実行できるのでこれも広義においてはセルフスピーキングに入ります。シャドーイングもそれなりの効果はあるのですが、「自分で考えてしゃべる」わけではなく、他人の言葉を繰り返すだけなのでその効果には限界があるのです。

詳しくは「NHK英語3つの謎」をお読み下さい。

そもそも英語でスピーキングするとはどういうことなのでしょう。スピーキングするということは冒頭でも少しふれたように、英単語を口頭で並べるといことです。従って英単語を口頭で並べる練習をすればよいのです。

通常なら相手がいってそのやり取りの中で自分が何を話すか決めるのである意味で楽ですが、一人でスピーキングする場合はこの話す内容を人工的に設定しなくてはなりません。

具体的には、例えば道を歩きながら目にした光景や考えていることを英語で話す(人目が気になるのであれば声を出さずに)、テレビのニュースキャスターの読み上げるニュースを英語に変換して発声する、好きなドラマの登場人物の話すせりふを英語に変換して発声する、などいくら

でもあります。

文字で一番いいと思われるのが、子供向けの物語、例えば「フランダースの犬」などです。これらは平易な日本語で書かれているので、実際のスピーキングで使われる文構造と同じくらいの文構造になっています。たかが子供向けの絵本と侮ってはいけません。

これを瞬間的に英語に変換して発声するには相当なスピーキング力が要求され、これが可能ならばスピーキング力はもう十分なレベルです。うそだと思うならば試してみてください。

想像するよりもはるかに難しいことがわかります。新聞の読書欄も内容によってはいいものもありますが、新聞社によっては文体的にこの訓練には向かないものも多いので注意が必要です。

このように様々なセルフスピーキングの方法があり、一人でも練習できるわけです。英会話学校へ行かなくても、本当にやる気があれば、セルフスピーキングをどんどん実行してスピーキングを上達させてください。肝心なのはやるかやらないかなのです。

横峰良郎氏について

プロゴルファー横峰さくら選手の父親である良郎氏は多くの人にとって見習うべきところがあると思います。それは「工夫と努力」ということです。横峰一家は鹿児島県鹿屋市出身で、ゴルフ場に高いお金をかけて通う一部のお金持ちとは違い、住宅の近くに自分でゴルフの練習場を作ってそこで訓練を積み重ねてプロとなり、現在のように活躍しているのです。

練習方法も独自の工夫を凝らし、例えば竹ぼうきでスイングの練習をしたり、おもりを使った練習をしたりしたそうです。良郎氏自身はゴルフの経験がなく、すべて独学でプロゴルファー二人（お姉さんもプロ）を育て上げたのです。苦しい家計を支えるために弁当屋をやったそうですが、今の日本でこのように創意工夫したり、強い信念を持つ人がどの

くらいいるのでしょうか。

英語学習に限って言えば、**留学したり、英会話学校へ行けば英語が上達するという甘い考えを持つ人が多く、書店へ行けば「これをやればネイティブみたいになれる」類の本を買ったりします。**

生活が豊かになりすぎて「自分で工夫する、考える、努力する」という肝心なものが抜け落ちてしまっているのです。

環境がいいに越したことはないでしょう。しかし、環境がよくても自分を磨くという意識がなければ、何事も絶対に向上しませんし、逆に**環境に恵まれなくても「絶対にこうする」という強い意志を持てば道は開ける**ものです。やるかやらないか、ここが肝心なのです。

音読について

音読がスピーキングの訓練としていいということが言われますが、本当でしょうか？答えは「**あるレベルまでは必須だがそのレベルを超えれば効果はない**」です。どういうことでしょうか？

まず、私自身の例で言えば中学の3年間学校の教科書を使って音読をしたことがその後のスピーキング力の構築に非常に役立ちました。

日本語でもそうであるように英語でも音声上の決まりが二種類あります。一つは単語の発音、アクセントで、これについてはいったん発音記号を覚えてしまえば、あとは単語を覚える際にその意味だけではなく、発音、アクセントもしっかりと覚えれば、これでもう十分です。

gooなどで音声をいちいち聞かなくても、そのとおりに発音できるはずです。私はこれをずっと実行してきて、スピーキングするときにはほぼ発音記号どおりに発音するので誰からも「発音がいい」と言われます。

もうひとつは、センテンスをどう発音するかで、これは主にイントネーションやストレス(強く発音するかしないか)が問題になってきます。

例えば I can play baseball. の場合、

アイキャンプレイベースボール

のように大きな字の部分強く発音すると相当おかしい英語だということになります。このセンテンスでもっとも重要な情報はベースボールなのでここを強く発音すべきなのです。

何語でもそうだと思いますが、大事な箇所を強く発音するという原則は覚えておいてほしいと思います。

他にもこういう原則がいくつかあるのですが、それらをすべて覚えることはあまり有用ではありません。頭だけでわかっている、実際にそう発音できるとは限らないからです。それよりも、実際の音声を聞いて、そのとおりに発音してみる練習を実施したほうがはるかに身につきます。

こういう訓練を繰り返しているうちにイントネーションや強勢についてのルールが自然にわかってくるのです。

発音が上手くなるために外国へいく必要はまったくありません。発音記号を覚えて、模範的な音声をまねて音読をある期間実行すれば、それがすべてです。

次に、本格的なスピーキングの訓練としての音読の効果ですが、すでに言いましたように、はなはだ不十分なものと言わざるを得ません。音読でセンテンスを話す際のイントネーションや強勢について「発声の仕方」を学ぶことはできても、自由自在に話す練習にはならないのです。もうすでに述べたように「英語を話す」というのは

- ①適切な単語を頭の中から引っ張り出して
- ②それを英語の語順で(音声として)並べる

ことに他なりません。音読では(シャドウイングでもそうですが)あくまで他の人が用意したセンテンスをオウム返しするだけであり、自分で考えて①と②を行うわけではないので「話す」練習にはほとんどならな

いのです。

繰り返しますが、音読は初心者が「英語の発声の仕方」を学ぶ上では欠かせないのですが、「話す」練習にはなりません。「話す」練習としては相手を見つけるか、一人でセルフスピーキングをするかどちらかです。

NHK英語の謎①

以前NHKのラジオジャパン（海外へ向けた英語放送）や、それ以外のNHK英語ニュースを聴いていた時に謎だったのが、なぜもっと発音の上手い人（ネイティブやバイリンガルなど）にアナウンスをやらせないのかということでした。

この番組では日本人アナウンサーがカタカナ英語に近い発音で英語を話すのです。帰国子女なんかNHKにはいくらでもいるのだから、そういう人を使ったほうがいいのではないかと考えたのです（浅はかにも）。

この謎が解けたのは数年後でした。ちょうど他の謎が解けたのと同じ頃です。その答えを言う前に、仲間から聞いた話をします。その人は以前、国際的な取引のある法律事務所で働いていたそうです。

その上司は絵に書いたようなカタカナ発音で、堂々と外国人クライアントとやりあう人だったそうで、そのあまりの威風にその人はすっかり「こういう風に発音しなくてはいけない」と思い込んでカタカナ発音をまねる有様だったそうです。

カタカナ発音大いに結構ではありませんか。日本にいる日本語を話せる外国人の日本語も「カタカナ」日本語のはずです。それをとがめる人はいません。「君の日本語はカタカナ日本語だ。おかしい」などと。「カタカナ」日本語が通じるのならば「カタカナ」英語も通じるはずです。

よく日本人はLとRの発音の区別ができないなどと言われます。たしかにそういう人も結構います。しかし、これが原因で何か人命事故が起

こったという話はいざ聞いたことがありません。オーストラリアのレストランでliceと発音したら本当にliceが出てきたという話も聞いたことがありません。

相手は我々よりはるかにリスニング能力の優れたネイティブです。ある状況下のある文脈における英単語をリスニングすること（音声を聞き取る）だけではなくてそれが本当は何を意図するのか理解することも優れているのです。

従ってlice(シラミ。rice米と発音が似ている)を注文されて怪訝な顔をしながら野良犬を探しに行く人はいないでしょう。カタカナ発音ノープロブレム。日本人英語学習者のやり取りを聞いていると発音がいい、悪いを重視する傾向が伺えますが、そんなことは本質的な問題ではまったくありません。発音が悪いと絶対に自己卑下してはいけなし、他人のそれについて論評することも控えるべきでしょう。

さて、NHKがほとんどカタカナ英語に近いアナウンサーを使う謎はもう解けましたね。日本人が話す英語なので、日本語の音声の影響を受けるのは当然のことなのです。帰国子女は日本人なので、彼らを使うのは構いませんが、彼らでなくてはならないことはありません。

しかし、**外国人で英語ネイティブを使うのは間違っています。これは日本人が英語で海外へ日本のニュースを発信する番組**なのですから。

カタカナ英語と失礼なことを言いましたが、これらのアナウンサーは紛れもなくアナウンスのプロです。例え外国語であったとしてもなめらかに明瞭に発音します。さすがです。ぜひ一度お聞き下さい。カタカナに近かろうと何だろとうと堂々と自信を持って話すという日本人にとってのお手本を示してくれているのです。

余談 ドイツにドイチェラジオというのがあって英語でドイツのニュースをやっています。顔が見えないので断言はできません（見えても向こうの人は同じ顔だからわからないが）がアナウンサーはドイツ人です。

ドイツ語のなまりがあるので。NHKと同じです。英語の放送だからといってイギリスからアナウンサーを呼ぶのではなく、自国のアナウンサーに英語でアナウンスさせるのです。

当然のことです。英語は国際語なので。ダッチ・ラジオもそう。オランダ人がオランダ語なまりの英語でアナウンスします。これらはABCというオーストラリアの国営放送局のHP上で一日中聞くことができます。巻末資料に掲載していますので聞いてみてください。ABCを聞いているとこれらの放送をNPRやBBCなどと共に聴くことができます。

かっこいい発音より聞きやすい発音

今、カタカナ英語でもいい、発音は気にするなど言ったばかりですが、しかし**聞きやすく発音する事は非常に重要**です。これは日本語を考えてもわかります。例えば、学校の授業などで、内容そのものがわからないというのとは別に「先生の声が小さい」「声が聞きにくい」といった経験はないでしょうか？私はあります。一番ひどかったのがある社会科の先生でした。小さな、不明確な声でぼそぼそしゃべる。おかげでその科目は不得意で単位まで落としてしまいました(いえいえ、こうやって責任転嫁するのはよくありません。落とした私が悪いのです)。

日本語のネイティブの日本人であってもこのように人によって聞きづらさ、聞きやすいという差が出てきます。声量、声の明瞭さ、話す速度。ネイティブの声よりもむしろノンネイティブの声のほうが聞きやすいというのは十分ありうることです。

もし、仮にTVタレントのデーブSさん(アメリカ人)がああ先生の代わりに教えていたのなら(この人の日本語はもちろん日本人のそれとは違いますがはっきり発音するので聞きやすい)私が単位を落とすことも(いや、勉強しなかったのが悪いのです)、ついでに卒業延期になることもなかったかもしれません。

それはともかく、これを例によって「逆に考えて」みればネイティブの英語よりもノンネイティブの英語のほうが聞きやすいことがありうると思うはずです。

今から二十年以上も前ですが、歌手の由紀さおりさんがテレビ番組の中でオリビアニュートンジョンの「ジョリーン」を歌ったことがありました。由紀さんは歌唱力に定評のある人で非常にきれいな歌に聞こえました。

もちろん、ネイティブの発音ではありません。しかし、もし発音の悪いネイティブがこの歌を歌うのとどちらが聞きやすいかと言えば、雪さんのほうでしょう。それはDSさんの日本語が発音の不明瞭な日本人の日本語よりも聞きやすいことを思えば容易に想像できるはずです。

本題に戻りますが、**肝心なことは聞きやすいことです**。かっこいい発音である必要はノンネイティブである我々にはまったく必要ありません。それは**本質的なことではない**のです。

ですから、発音がかっこいい、かっこよくない、で判断すべきではありません。そうでなく「聞きやすい英語」を話すように心がけるべきなのです。そのためには早口すぎず、遅すぎず(あまり遅いと聞いているほうはじれますから(笑))、**明瞭に話す**ことを心がけるべきでしょう。

それができたならばかっこよく話す練習をしてもいいかもしれません。これは**発音記号どおり、発音する**というただこの一点ですのでそう困難なことではないと思います。

話す速度についての補足

英語のネイティブや帰国子女などは時おりものすごい速さで話すことがあります。我々はこれをまねるべきではありません。なぜなら相手に通じない可能性があるからです。相手が英語ネイティブとは限らない、いろんな国の人とコミュニケーションをとる国際英語という観点からは

「すらすら話す」のは好ましくても速射砲のように「ダダダダーツ」と話すのは禁物です。

もし英米人が同国人を相手にしているのと同じように「ダダダダーツ」とあなたに話してきたとしたら遠慮なく「申しわけないが、もう少しゆっくり話してください」と言ってください。国際英語の場では、お互いの言っていることを理解するのが目的ですから。

繰り返しますが、英米人や帰国子女が時おり、やるような「ダダダダーツ英語」をかつこいと思っても、真似てもいけません。相手が**聞きやすい速度**で話すべきです。

余談 アメリカのCNN放送は速射砲英語で知られますが、アメリカ人ですら早過ぎて聞きにくいと感じるそうです…。

単語の発音耳で覚えるのは至難の業

以前、単語を覚える時は発音記号にも留意する必要がある(これは発音も上手になりたいという場合の話ですが)のメリットについての話をしていたら、「私は耳から単語を覚えるようにしている」という方がいました。残念ながらこの方法が有効だとは思えません。なぜなら外国語を聞いてその発音を正確に聞き取るのは至難の業だからです。

話が少し飛ぶようですが、私の知り合いに久手堅(くでけん)という方がいます。沖縄独特の名前で初対面の人に名前を聞かれるとその方ははっきりと相手に聞こえるように(くでけん)と発音します。

しかしそれでもほとんどの方は「え？」と聞き返してきます。これは聞いたことのない名前だと日本語であっても「データがない」と一回で聞き取るのは困難だからです。私にも同じような経験が何度かあります。例えばある方と初対面のときに、その方が「塩飽」と名乗ったことがあ

ります。

これは「しわく」と読みますが、相手のはっきりと「しわく」と発音したにもかかわらず、聞いた事のないあまりにも珍しい名前の為に私の耳、というより脳が聞き取れず、2度ほど聞き返しました。しかし、日本は広いです。こんな名前があったとは。

さて話を戻しましょう。これらの事からわかる事は**聞いたことのない単語は例え母国語であっても聞きとるのが困難**だという事です。これは聞き取るという作業はその対象となる音声を一字一句聞いているのではなくそれまでに頭の中に蓄えた情報(人の名前でも何でも)と照らし合わせて、聞いて理解しているという事なのです。

従ってその情報がないとなると脳はパニックを起こす事になります。このように母国語でさえ初めて聞く単語を正確に聞き取るのは難しいのですからこれが外国語なら不可能と言っていいでしょう。

聞き取れないか誤って聞き取って誤った形で記憶して誤った発音をするのが落ちです。

ですから、大昔とは違って今は辞典と発音記号という宝物があるので、これを活用して**発音記号を頼りに単語を覚えて**ください。何でも言いますが我々はネイティブのように耳で聞いて覚えたり、話したり出来ないのです。

発音記号やスクリプト(リスニングの練習で聞き取れない所は)や文法を使って英語力を向上させるべきなのです。**ネイティブが英語を身につけると我々が英語を学習する方法は違って然るべき**なのです。

和製英語などについて

和製英語等には通じるものと通じないもの2種類あり、通じないものについては注意しなくてはなりません。いくら国際英語が母語の影響を受けて当然とは言っても、それは音声上の話であって、日本人が勝手

に作って英語としてまったく通用しないものを使うのはご法度です。間違ってもHe is an ikemen. などとやってはいけません。通じるものには オーダーメイド(正しくはmade-to-order)などがあり、こういうのはそれほど問題ありません。

もうひとつ、英語以外の言葉が英語と思われて使われている場合があります。ピーマンなどがそれでこれはフランス語です。相手がフランス人なら別ですが、それ以外では通じません。巻末に主な和製英語等を掲載しました。これらすべて覚えるのはたいへんでしょうから、まずは通じないものから修正して行って、時間があればそれ以外のをやるといいでしょう。

決まりきった会話表現

英語は基本的に単語を並べれば通じますが中にはこれが当てはまらないケースがあります。日常的な会話で使われる決まりきった表現で、これについては、「単語を並べる」という理論はあてはまりません。丸ごと暗記する必要があります。以下の5種類があります。

- A. 覚えないと話せないし、言われた時に意味がわからない。
- B. 覚えないと話せないが、言われた時に意味はわかる。
- C. 他の表現を使って話せるが、言われた時に意味がわからない。
- D. 他の表現を使って話せるし、言われた時に意味がわかる。
- E. スラング (俗語)

詳しく説明しましょう。

- A. 覚えないと話せないし、言われた時に意味がわからない

It serves him right! (あいつめ) いい気味だ! (himの部分はherになったり、youになったり変わってきます)

この表現を知らないで、こういう事を言おうとしても無理です。また、これを聞いたときに理解することもできません。

B. 覚えないと話せないが、言われた時に意味はわかる

That was close! (もう少しだった!) 例えば、もう少しで車にぶつかりそうな時にこう言います。この表現も知らなくては口から出てこないでしょう。ただ、言われた場合には意味はわかると思います。closeは「近い」という意味なので、事故に近かった(もう少しで事故だった)という意味なんだろうと察しがつくはずです。

C. 覚えなくても、他の表現を使えるが、言われた時に意味がわからない

Where were we? 話の途中で中断したとか、話がわき道にそれた時に「あれ? 何の話だったけ?」という意味で使います。これを知らなくても、こちらがそう言いたければ、What were we talking about? などで表現できます。ところが相手に使われると「どこにいた? ここにいたじゃないか?」などと勘違いする可能性が大です。

D. 覚えなくても、他の表現を使えるし、言われた時にも意味がわかる。

Good for you! は「よく、やった!」という意味です。これを知らなくても You did a good job. と言えばいいですし、相手がそう言った場合も意味はわかるはずです。

E. スラング (俗語)

スラングにも「よく使われる、一部の人が使わない」など程度の差はありますが、基本的にこういうものは覚えるべきではありません。逆に考えればわかるでしょう。日本語を学んでいる外国人に日本語の俗語(例えば、うぜー)を教えるでしょうか? まともな人ならば、そういう汚い言葉ではなく、きれいな美しい日本語を教えるはずですよ。

私自身、日本人としてきれいな日本語を心がけているので、こういう汚い言葉は絶対に使いませんし、またそういう言葉を外国人に教えることも絶対にしません。それと同様に、外国語を学ぶ場合もきれいな表現を学びたいと思うのです。ですから、スラングは一切シャットアウトしています。英語を覚えるのは国際親善のためでしょうから、それを台無しにしかねない、スラングは覚えてはいけないと考えます。

「ネイティブはこう言う」類の本には、スラングや標準的でない会話表現（一部のネイティブしか使わない）が含まれている場合がありますので、そういう本を活用する際は注意が必要です。スラングは覚えるべきではありませんし、また標準的でない会話表現も覚えて使うようなことは絶対にやめるべきです。

標準的でない会話表現を使ってはいけないというのは相手に通じない可能性が高いからです。通じないのを覚えてもしかたありません。「ネイティブが使う口語表現」なのに通じないはずはないだろう！」と言うかもしれませんが、2つ根拠があります。

①すべてのネイティブが知っているわけではない

Nice to meet you. なら100パーセント通じます。ところが、アメリカ人しか使わない、イギリス人しか使わない、アメリカのある地域の人しか使わない、イギリスのある階級の人しかわからない標準的ではない英語表現となると、すべてのネイティブに通じるわけではありません。ですから、口語表現を覚える際にはなるべく、英でも米でも通じる「国際的に通じる会話表現」を覚えるほうが望ましいのです。

②相手がノンネイティブの場合

これも上とほぼ同じことです。ネイティブによっては通じない場合がある標準的でない英語表現がノンネイティブに通じるわけはありません。「にへーで一びる」って知っていますか？これは沖縄の言葉で「あ

りがとう」を意味しますが、東京にいる時にこの言葉を私は使いません。通じませんから。

つまり、沖縄でしか使われない日本語なので、それをそれ以外の場所では使わないのです。ましてやこれを「日本語として」外国人に教えることなどするはずがありません。日本語のネイティブである（沖縄以外の）日本人ですら、知らない日本語を外国人に教えるなんてことをしたら、大変なことになるでしょう。2年間沖縄に住んで日本語教室に通って覚えた日本語が実は沖縄語で、沖縄以外ではまったく通じなかったなんてことにでもなれば、笑い話では済みませんから。

少々脱線しましたが、このように英語の口語表現を覚える際には国際的に通用する表現を覚えたほうが望ましいのです。厳密な分類は難しく、また分類したとしても使われる頻度によって重要性が違ってきます。一旦分類してみましたが、実用的でないとわかり、中断しました。

重要さの度合いに応じて分類したものが巻末にありますので、お役立て下さい。会話表現は数にきりがなく、ある程度で見切りをつけることが必要ですが、これだけやれば、まず十分でしょう。米でも英でも使われているものを取り上げました。

「すぐ使える会話」では限界がある

書店の英会話に関する本の中には「今すぐ使える会話表現」のようなタイトルの本がありますがこういうのは一部の例外を除いて、やめたほうがいいです。なぜかと言えば覚え切れないからです。こういう本には例えば

Do you have anything to do this evening?(今日の夜なんか予定ある?)

のような英語のセンテンスとその意味が羅列されていて、これを覚えればすぐに使えるとされています。確かにそれはそうかもしれませんが、で

もこの方法では何百あるいは何千というセンテンスの暗記が必要になってくるわけで、そんなに覚えることが出来るのでしょうか？

私自身で考えてみると、出来ないと思います。こんなに覚えられるわけがありません。単語を覚えるだけでも結構大変なのはみなさんもご存知のはずです。これがセンテンスまるごととなるとまず不可能だと思うのです。また覚えたにしても、それだけで自分が言いたいことをすべて表現できるわけではないでしょう。

海外旅行か何かで現地の人と話す必要がある時に備えて、こういうものをポケットに偲ばせるのはいい考えだと思います。例えば私ならフランス語が出来ないのでもしフランスに行くのならこういうのを持っていくはずですが。まさかほんの短期間で単語と文法を勉強して間に合うわけはないので、こういうワンポイントしのぎの本は貴重でしょう。

しかし、再三言いますが、こういう本で英語をきちんと勉強するのは無理です。それだけの時間と記憶力を別のこと、つまり単語に向けたほうがいいのです。単語を並べれば通じるのですから。もちろん、中級上級者ならば文法にも取り組まなくてはなりません。

センテンスごと覚えるというのは記憶の負担が大きいので、絶対に必要なこと、すなわち単語を並べる方法が通用しない場合 (It serves him right!などの前項で挙げた会話表現) のみに限定して覚えて、それ以外は単語や熟語を覚えることをお奨めします。

実際英会話の99パーセントは単語を並べれば通じるのですから、これがもっとも効率のいい方法なのです。くれぐれも言いますが、センテンスごと丸暗記は一見即効性があるように思えても、中長期的にははなはだ学習効率が悪いので、先にあげた例外を除いて、絶対にこういうことはやってはいけません。

単語が出てこない場合

スピーキングしていると必ず「これどう言ったらいいのだろう？」と頭の中で思うことがあるでしょう。英語上達するためには普段から語彙力を鍛えることは欠かせませんが、このような状況を切り抜ける方法を紹介します。

①「知っている表現」で間に合わせる

例えば墓をド忘れしたのならlong sleep place after death などと説明してもいいのです。知っている単語を工夫して使って、それなりの意味が出せれば、相手は文脈から判断してくれます。こういうときに、思いだそうとしてあれこれ考えてあたら時間を費やしても生産的ではありません。相手も待ちくたびれるでしょうし。long sleep place after deathなどで代用すれば、場所が和むことは間違いありませんし(笑)。こういうテクニックを使いこなして、国際コミュニケーションを図りましょう。

②考える時間を稼ぐ

「アー…」で時間を稼いだり(このアーは英語にも良く似たer という間投詞がありますし、発音もしやすいので私はよく使います。えーとー、など明らかな日本語はまずいと思いますが、そうでなければこのような発音しやすい音声は貴重ではないでしょうか。英語だからといって、発音しづらいErや使うとどうも不自然な感じのする(笑)Well…を無理に使う必要はないでしょう。しかし、この方法でもあまり長い間相手を待たせてはいけません。I don't know how to say.などで、相手に助けを求めます。

③逃げる

別の話をふって逃げます(笑)。国際コミュニケーションが上手になるとこのテクニックを知らず知らずのうちに覚えだします。これの上手い人だと相手もこちらがごまかしてうまく逃げた(面子を保つために)ことに気づきません。こうなるともう達人です。

難しい日本語が浮かんだ場合

日本語には英語に直しにくい表現があります(逆もそうですが)。そういう表現が頭に浮かんでしまうとそれを英語に変換できずに英語が出てこないということが結構あります。例えば優柔不断。こういうのが浮かんでしまうと変換に苦勞します。理想は、英語で考えることでこれは英語を訓練すればするほどそうなってきます。

しかしまだ慣れないうちあるいは何かの拍子にこういう日本語が出てきてしまった場合はしょうがありません。日本語をいったん別のやさしい日本語に変換してそれを英語に再変換します。優柔不断 → 決断が遅い → indecisive

しかしこうするとスピーキングが遅くなるのでなるべくこうならないように英語を話すときはなるべく英語だけで考える習慣をつけたいものです。ある程度以上の英語力があればこれは可能です。以下にこういう変換例を5つだけ列挙します。

- ①気が気でない → 心配だ
- ②愛嬌がある → 明るい
- ③朝飯前 → 簡単
- ④後の祭り → 遅すぎ
- ⑤煮え切らない → 決断力が無い

もしこういうのが頭の中に出てきてしまったら、このようにいったんやさしい日本語に直してから英語に変換します。しかし、極力、そうなら

ないようにして下さい。

映画での勉強

ハリウッド映画などで会話表現を学ぶことについてお話ししましょう。これは問題のほうが大きいように思います。ひとつは、俗語が混じっている可能性が大きいということです。その映画にもよりますが、一般的に言えばアメリカ映画では俗語が頻繁にでてきます。

しかし、それをもし国際英語を使用する場面（様々な国の人がいる）で使用しても通じないはずで、国際英語では俗語は使ってはいけないのですから。また通じないだけでなく、通じた場合のほうがさらに悲惨な状況を引き起こす可能性があります。人格を疑われる可能性すらあります。

ただ映画を見て、字幕を見るだけではそれが単に会話表現なのか、使ってはいけない俗語なのかまったく判断が付きません。私としては映画を学習材料にするのはお勧めできませんが、どうしてもというのであれば、その表現をしっかり調べていい言葉なのか、そうでないのか確認する必要があります。

もうひとつはアメリカ英語に偏ってしまうことです。もちろん、どうしてもアメリカ英語がいい、というのならいいのですが日本人にとって必要な英語の勉強がしたいのならアメリカ英語に偏ってしまう映画での学習は避けるべきです。

私自身の話をすれば映画を見たことはほとんどありません。しかし、英語は相当上手に話せますし、外国の人から「きちんとした英語」であるとよく言われます。何度も言うように、教科書やニュースなどできちんとした英語を学んできたからです。

ニュースではインタビューなどで会話が頻繁に出てきますが、俗語はほとんど出てきません。これも逆に考えればわかることで日本でも友人

同士では多少荒っぽい言葉を使ってもテレビのインタビューともなるとそうはいかないでしょう。やはりていねいな言い方を普通するはずです。

ですから外国人が日本語を学ぶ場合に乱暴な言葉をそのまま使う映画を参考にすべきではないでしょう。ニュースならそういうことはないでしょうから、外国人はこれを教材に勉強してきちんとした日本語を学んでほしいと思います。同様に、日本人が英語の会話表現を学ぶ場合もBBCなどを参考にきちんとした英語を学ぶべきだと思います。

日本を知ることの大切さ

外国人と英語を話す場所、普通に言えば英会話学校などで外国人と話をする場合、話題が外国のことであることが非常に多いみたいですが、これは主に二つ理由があると思います。ひとつはそれが共通の話題であるということ。英語好きな人で外国に行ったことがない人は相当珍しいようで、私がそう言うとう日本人も含めてみな驚きます。

大体理由を聞かれますが「**予算の問題**と忙しいから」といつも答えています。このうち前のほうは本当です(笑)。そういうわけでこの海外旅行、「3年前にイタリアのどこそこに行った」「アメリカのサンフランシスコの何とかブリッジは」のような話題は私がかつても苦手とするトピックで、これが出るとその間はずっと聞き役です。

何しろそういう経験がないのですから、話をでっち上げでもしない限り、話すネタがありません。ところが困ったことにこの話題は必ずといっていいくらい、真っ先に出てきます。すでに言いましたように、海外旅行好きな人が多く、また日本にまでわざわざ来るような外国人も旅行好きが多いからで言うなれば双方の思惑(?)が一致するからでしょう。どんな話でもまずは話題というものがあるわけでそれがお互い共通なら話ははずみます。

そして、もうひとつの理由(これが問題)が、そこにいる英語好きな

人たちは日本のことはあまり知らないということです。これは実は多くの日本人に言えることで、**日本人は日本をあまり知らない**のです。これは困った問題です。確かに再三言うように英語は国際共通語であり、もちろんそれを通じて外国について学ぶことも大事です。

しかし、それ以上に**自分の国の文化や価値観を世界に発信することが重要だ**と思うのです。そのためには自分の国について知らなくてはなりません。

海外留学について

すでに述べたように私は日本を出たことがないので、当然留学経験はありません。だからひがみで言うわけではないのですが(笑) 今のような海外留学をあおるかのような風潮には大いに疑問を感じます。中高生については特にそうで、その一つの要因が機会均等の問題です。

留学するには大金が必要です。しかし、すべての学生が裕福な家庭にいるわけではないはずです。むしろ、留学させるだけの余裕がないのが普通ではないでしょうか？そうすると、今のようないしなくて「今の時代留学くらいしなくては…」といった風潮は多くの生徒にとって、心理的な負担になると思うのです。

「朋子ちゃんのお家はお金持ちだから留学できた。でも私の家は楽ではないので、私は留学できない。お母さん、何でうちは貧乏なの?!」などと聡子さんがお母さんを責めるかもしれません。こういう状況を作ってはいけないと思うのです。

私自身が学生の頃は留学熱はさほどでもなかったのですが、裕福ではない家庭に生まれた私が「留学して英語を磨きたいのに、何でうちは貧乏なんだ?!」などと天をうらむなんてことにはなりませんでしたが、今はおそらくそういう人が多いのではないかと思います。

しかし教育の機会は平等であるべきだと思うのです。したがって、そ

れをさまたげるような昨今の風潮には甚だ疑問を感じざるをえません。留学しなくては認められない、なんていうのは絶対におかしいはず。知りあいで、大金をはたいてアメリカの大学に留学した人がいました。その人は某有名私大Wで講師をしていて、教授になりたいという夢をもっていました。

専門は消費者保護だそうです。大学で教授職につくには、アメリカの大学での留学経験が必要ということだそうです、まったく理解できないことです。これは逆に考えればわかることです。もし逆にアメリカの大学で教授になるには日本の大学に留学する必要があるとしたらどうでしょうか？まったく理不尽なことでしょう。

アカデミックな世界に限らず、留学したということがステータスになることがこの国では多いようですが、もうこういう風潮、ものの考え方はやめるべきだと思うのです。実体がないのですから。

特に英語講師についてはこういう風潮が強いようです。留学したことが採用条件になる場合もあるようですが、どこにしようと勉強する人ができるようになるのであって、留学すれば自動的に英語が上達するわけではありません。国際語である英語はどこにいても学習できます。

特に今はネットがあるので、離島でもそれほど苦労しません。やる気と工夫です。現に知り合いで奄美大島在住の田畑さんはそこで勉強して英検1級に受かりました。本人は「**確かに奄美には大きなチャンスはないかもしれないがでもやればここでもできる**ということを生徒に教えてあげたい」と言っていました。

塾の先生をしています、こういう先生から教わる生徒は大変幸せだと思います。またこういう先生を私は心から尊敬します。チバリヨ（気張りよー → がんばれ）！留学しようがしまいが、どこに**いようが、努力する人が報われるべきだ**と考えます。

NHK英語の謎②

以前NHKのテレビ番組ビジネス英会話を利用してリスニングの訓練をしている時期がありました。一年くらいでしょうか。その時の番組の舞台は日本国内のある会社で社員はアメリカ人、日本人、インドネシア人(多分)、韓国人など様々でした。

その中で謎だったのが外国人が日本人のことを例えば、タナカサン、サトウクンなどと呼んでいたことです。「**英語なのになぜミスターなどを使わないのだろう**」と長い間(実に八年も!)疑問に思っていました。しかし、この呼び方のほうが日本人相手だとしっくりくるので、私もそれから英語を話すときにこのようにしていました。

この本の原稿の執筆中にNHKにこの件で問い合わせをしたら「日本人がこのように呼ぶのを知っている外国人がその呼称をそのまま使っただけです」というそっけない(?)返答を頂きました。

「なるほど、そうだったのか!さすがNHK!」と大向こうをうならせる答えを期待していてそれをここにちゃっかり掲載しようと思っていたのです。**肩透かし**をくらったような気分ですが、さすが**相撲中継**を何十年も続けているNHKです。仕方ありません。面倒くさいですが、自分でその理屈を考えてみることにしました。すると、この長い間の謎がついに解けたのです!

目からうろこが取れる思いでした。NHKは日本を代表する報道機関です。正しい日本語(アナウンサーの日本語が時々おかしいが)、正しい振る舞い(職員が時々捕まるが)、そして正しい英語をさりげなく、我々に示してくれているのです。

ありがとう、さすがみんなのNHK!この大発見を独り占めしていてももったいないので、みなさんにもこっそりお教えしましょう。

まずはこれも「逆から考えて」みましょう。舞台設定はアメリカにある日本の会社です。T物産としましょう。この会社の多くは日本人で一

割程度はアメリカ人です。公用語は日本語。したがって現地雇用のアメリカ人も社内では日本語で話します。以下は大和田信一部長とその部下のアメリカ人との日本語でのやりとり。

大和田信一部長　クルーズ　トム君、最近調子はどうかね？

クルーズ　トム君　いやー、部長。ぼちぼちですよ

大和田信一部長　　そう言えば、彼女のモンロー・マリリンちゃんは元気かね？

クルーズ　トム君　それが…ゲイツ　ビル君に取られちゃいました。

…どうでしょうか、この寒い会話。日本語を話す場合でもアメリカという異国でなら何もかも100パーセント日本式ではこのようにおかしいなことが生じます。クルーズ　トム君じゃいかにも変でしょう。

こういう風に言われる本人だって「僕の名前はトム　クルーズなのに何で逆にするんだらう。いくら日本語でも名前だけは本来の名前で呼んでほしい」と思うに違いありません。彼の思いは当然です。向こうではファーストネームで呼ぶのですから。

大和田信一郎部長　　トム、最近調子はどうかね？

クルーズ　トム君　　いやー、部長。ぼちぼちですよ

大和田信一郎部長　　そう言えば、彼女のマリリンは元気かね？

クルーズ　トム君　　それが…ビル（ゲイツ）に取られちゃいました。

これなら、うまくフィットしますね。何の違和感もない。こうすべきなのです。書籍や字幕などで見られる英語の名前に対する表記は実際こうなっているはずです。では戻って、なぜNHKの英語番組に出てくる日本の会社の中で「タナカサン、サトウクン」と英語を話しているにもかかわらず、ミスター　やファーストネームで呼ばないか考えてみましょ

う。

一番の理由は「さん」「君」に相当する英語がないことだと思います。「さん」はまだミスターやミズを使えるかもしれませんが「君」となるとこれは言い換えが不可能です。「君」は自分と同等か目下に対して使う敬称です。しかし、英語では同僚や部下に対してファーストネーム呼ぶだけで、「君」に相当する敬称がありません。NHK ビジネス英会話の舞台は日本の外国人も多い会社です。

もしここで英語で話しているのだから英語式に呼びかけるとどうなるでしょうか？ちょっとシュミレーションしてみました。この会社は東京にある日本の会社で社員の半分は外国人。

この外国人は2年ほどでまた別の支社に転勤になるので、日本語をじっくり勉強することができません。そこでこの会社では日本語も使いますが英語も国際共通語として使っています。登場人物はコワモテの田中和夫部長と比嘉ひろし社員です。会話は英語ですが、英語のままでは読みづらいので、勝手に私が通訳しておきました。漢字では雰囲気出ないので、**カタカナにナッテイマス**。

シュミレーション1

田中部長 ハイ、ヒロシ。イマ、アイテルカナ？

比嘉社員 スミマセン、ミスタータナカ、イマトテモイソガシイデス。

この場合、比嘉社員のミスタータナカという呼びかけはいいとしても田中部長のヒロシという呼びかけは変でしょう。ここは日本です。外国人も多いとは言え、日本の会社です。いくら部下とはいえ、呼び捨てはよくありません。

日本人同士では「比嘉君」と君付けで呼ぶのに、英語だからといって、ヒロシでは比嘉社員の中の頭の中ではその切り替えができずに、違和感を持つようです。相手はコワモテの部長なので「親しみをこめて」ヒロシな

どと呼ばれるとなおさらです。

シュミレーション 2

今度は同じ比嘉社員と同僚社員の鈴木まり子さん。

比嘉社員 マリコ、イマアイテル？

鈴木さん ゴメンナサイ。イマトテモイソガシイノ。

これもやはり二人とも違和感があるようです。日本語のときは「比嘉さん」「鈴木さん」なのに、英語になると急に呼び捨てですから。恋人同士ではないので、お互いになれなれしいと思えるのです。

だめ押しでもうひとつ 田中部長と鈴木まり子さん。

田中部長 ユキコ、イマ、アイテルカナ？

鈴木さん ホントウニスミマセン、ミスタータナカ、イマトテモイソガシイデス。

田中部長からユキコと呼ばれた田中さんには何か上司と部下の不倫のように聞こえてしまうのです。「気安く私を呼び捨てにしないで」と内心思っている相手は上司、しかもコワモテです。何も言えないのでストレスがたまっていきます。

これでまだびんとこなければ自分の会社でこのような状況を設定して想像してみればわかるでしょう。いくら英語とはいえ日本で、英語式の呼び方をするのは日本人のアイデンティティから言って、相当不自然なのです。

こういう場合、

田中部長 スズキサン、イマ、アイテルカナ？

鈴木さん ホントウニスミマセン、タナカブチョウ、イマトテモイソガシイデス。

田中部長 ヒガクン、イマ、アイテルカナ？

比嘉社員 ホントウニスミマセンタナカブチョウ、イマトテモイソガシイデス。

比嘉社員 スズキサン、イマ、アイテル？

鈴木さん ゴメンナサイ、ヒガサン。イマトテモイソガシイノ。

とすべきでしょう。自己紹介の時もちろんアトム ヒガ ヒロシです。

もうひとつ。「先生」に相当する英語ありませんね。

「先生」という言葉の響きは英語のティーチャーとはまったく異なる深い尊敬の念がこめられているはずなのです。

ですから、これを単にミスターとすることはできないでしょう。したがって英語で話す時もミスター・ザハではなく、ザハ・センセイとお呼びすべきでしょう。「先生」「師匠」本当にすばらしい響きを持った美しい日本語です。

NHK英語の謎③

NHKのテレビ番組ビジネス英会話についてはさらに謎だったことがあります。それは登場人物になぜノンネイティブを混ぜるのだろうかということです。状況設定が日本なら日本人が出るのはわかります。ところが、例えばインドネシア人とか韓国人とか、中国人とかノンネイティブが多数出てくるのです。

私は当時、リスニングの訓練としてこの番組以外にもNHKの英語講座でレベルの合うものはすべて聞いて勉強していました。それは英検1級のリスニング対策のためでしたので、英検1級リスニング問題で放送

されるネイティブの英語を聞いたかったわけです。

そういう状況でしたので(あるいは仮にそうでなかったとしても)日本人に必要な英語が本当は何であるか、まだ開眼してなかった私には、甚だ不満であったのです。「英語の講座なのだからきれいな英語を話すネイティブの英語を教えるのべきではないか」浅はかにもそう思っていました。

この謎が解けたのは数年後です。その頃私はBBCをネットでよく聞いていましたが、BBCもやたらノンネイティブの英語が出てくるのです。ヨーロッパ、アフリカ、アラブ、アジアあらゆる地域です。ネイティブの声も聞こえてきますが、ノンネイティブの声も結構あり、例によって私には不満でした。しかし、ある日気づいたのです。「**現実の国際コミュニケーションの現場ではむしろノンネイティブの英語を聞く機会が多い**」事に。

話は変わりますが、日本でワールドカップが行われた時のことを覚えているでしょう。さまざまな国からさまざまな選手がやってきて、日本各地でキャンプ場を提供したりして歓迎しました。中でも最も印象に残っているのは大分県中津江村へカメルーン代表チームが本当に来るのか来ないのかですったもんだした騒動かも知れません。

この事件でこの村とそのほのぼのした村長さんは有名になったわけですが、そのカメルーンの公用語はフランス語と英語です。当然彼らの英語は英米のそれとは異なるはずですが、音声的あるいは表現上、現地語あるいはフランス語の影響を間違いなく受けているはずで、英米の英語に慣れている人には聞きづらはずです。

しかしもちろんだからと言って文句をつけるわけにも行きません。お客さんですし、そうでないとしても英語は話される地域によって様々なのです。「あなたの英語は聞きづらい。すまないが、アメリカ人かイギリス人のように話してくれ」とは言えないのです。英語を話す人口8億5千万のうち、英語を母語として話す人よりも外国語として話す人のほ

うが多いそうです。

ここから導き出される結論は海外に出た場合(あるいは国内でも)英語を話す相手がネイティブである確率よりもノンネイティブである確率のほうが高いということです。

ですから、リスニングの訓練ならば、ネイティブだけではなく、ノンネイティブの英語を聞き取ることも必要なのです。知り合いで海外貿易の会社に勤めていて、イタリアを担当している方がいます。その方の話ではイタリア人の英語は聞きづらいのだそうです。

もちろんそう文句を言えるはずありません。私自身は聞いたことがなく、一度聞いてみたいですが。私自身の経験ではパキスタンとかバングラディッシュとかあの辺りが大変聞きづらいという印象があります。

このことはあるネイティブも同様の感想をもらしていました。ネイティブがリスニングに苦勞するなら私が苦勞するのも当然です。このネイティブの話では日本人の英語ははっきり(clear)発音するので聞きやすいとのことです。

そう言えばBBCなどで時々日本の学者などがインタビューに答えるのを聞くとカタカナ英語の人がほとんどで、音声的には上手いという印象はありませんがclearに発音するので、(日本人の私には当然ですが)やはり聞きやすい。これと同じ印象をネイティブも持っているという事はぜひ覚えておいて欲しいと思います。

もっと自信を持っていいのです。聞きやすいというのが一番大事なのです。ちなみにドイツ人の英語もはっきりと発音するので聞きやすいです。オーストラリアのABCで聞けますから一度聞いてみて下さい。

さて、話はだいぶそれでしたが、「NHKにノンネイティブが多数登場する謎」の答え、もうお分かりですね。現実に英語を使用する状況を想定していろいろな国の英語に慣れるように親心で?このようなキャスティングにしてくれているのです。ありがとう、さすがみんなのNHK!

「英作文の書き方」は存在しない

よく「英作文の書き方」といったタイトルの本を目にしますが、厳密な定義の上でなら、そのようなものは存在しないと思っています。

なぜなら、もし「英作文の書き方」が存在するのであれば「フランス語作文の書き方」「ドイツ語作文の書き方」「中国語作文の書き方」「ロシア語作文の書き方」「スワヒリ語作文の書き方」など地球上のあらゆる言語についてその作文の書き方が存在することになりますが、言語が違うからといって文章の書き方が違うのでしょうか？

そんなことはありません。何語であっても文章の書き方は同じはずです。文章というのは通常いくつかの段落が集まって（段落一つの場合もあり）成り立っています。各段落にはもちろんいくつかの文が含まれます。

逆から説明すれば、文がいくつか集まって段落を作り、段落がいくつか集まって文章を作るということです。まるで、分子が集まってアミノ酸を作り、それが集まって筋肉を作り、それが集まって臓器を作り、ついでに骨格などといっしょになって人体を形成するのと同じようなものです。… あ、あと魂も要りますね、人間の場合は。

このようにして人体が出来ているはずですが、あるいは国によってこの構造に違いはあるのでしょうか？ある国の人々は分子がいきなり筋肉を作っていたり、また別のある国では筋肉と魂だけで骨格を持たないということがあるのでしょうか？

外国に行ったことがないので断言できませんが多分生物学上、進化論上、そういうことはないと思うのです。多少、色黒とか、背が高い低い、髪の色が黒っぽい、茶色いなどの違いはあっても本質的には同じだと思うのです。だいぶ飛んでしまいましたが(笑)、文章もそうなのです。文があって、段落があって、文章があるのです。

これ以外のパターンがあるのなら、それはもう文章ではありません。

もちろん日本語なら日本語の単語や文が使われます。スワヒリ語ならスワヒリ語です。しかし、文章の構造は同じです。では使用される言語の違い以外で一体何が違うかといえば、うまい文章かそうでない文章か、これが違うのです。

上手い文章の書き方というのは存在します。それが何語であるかは、くどいようですが、関係ありません。あるのはただひとつ文章を上手に書く方法なのです。そして、日本語で作文が下手ならば英語でも下手ということになるわけです。ですから、逆説的なようですが、**英語で上手に作文するのに必要なもの、それは日本語で上手に作文する能力**ということになるのです。

英語だけやっけていても絶対に英作文は上手くなりません。日本語作文の下手な日本人が英語で上手に書けることは絶対にありえないのです。

国語が出来ないと英語も出来ない

質問です。大嶺さんという野球の好きな八重山の人がいます。ある日本語で書かれた本を読んだのですが、結構内容が込み入っていて、読めません。その大嶺さんが、同じ内容について英語で書かれた本を読んで意味がわかるのでしょうか？

…あまりの愚問に気分を悪くされたら、すみません。言いたいことは要するに、**自分の国の言葉で理解できないのならよその国の言葉ではいっそう理解できない**、ということです。

日本では海外の翻訳本が結構あり、中には日本語で読んでもわからないものもあります。しかし、それを日本語に訳した人がいるわけですが、こういう人たちは英語が出来るから訳せるのでしょうか？それもありません。

しかし、それ以上に大事なのは国語の力なのです。国語で読んで理解できる力があって、はじめて英語でも読むことが可能になるのです。も

う一度言いますがもちろん英語の力も必要です、しかしその前にまずは母国語で読む能力が無くてはいけません。

そういう意味において、逆説的ですが、**英文を読むのに必要なのは日本語を読む力**なのです。日本語を読む力が弱ければ、英文を読む力もそこで、制限されてしまうからです。英文だけを読んでいても英文を読む力は強くなりません。まずは、日本語で読む力を強化すべきなのです。

こういう仕事(英語講師)を二十年やっているとそのことを痛感します。私の英語は国語力なくしては絶対に語れません。国語で書かれた文章をたくさん読み、書き、考えたから、英語も上達した - こう言うところまで多くの人がみな不思議がりました。しかし、これは紛れも無い事実なのです。

他の教科(英語以外)もすべて国語で書かれているのですから、国語の習得がおろそかであるのならそれ以外のすべての教科の習得もおろそかになるのは論を待たないでしょう。また、国語できちんとした作文が書けないのであれば、英語でも絶対にきちんとした作文は書けないのは説明しなくてもわかるでしょう。

英作文の添削をやっていますが、きちんと書ける人はまれです。その原因は**英語以前の問題であることが多いのです。すなわち日本語でも書けない人が多い**ということです。書けない理由は例によって、論理がわからないからです。では、論理はどう勉強すればいいのでしょうか？

論理をどう身につけるか

ではどうすれば論理的な文章が書けるようになるかといえば、まずは論理的な文章に多く触れることです。私は作家の立花隆さんが好きなのですが、立花さんはこれまで多くの作品を手がけています。その中に「僕はこんな本を読んできた-文藝春秋」というのがありその名のとおり、立花さんがこれまで読んできた本の紹介がされていますが、読むと

普通の人（もちろん私も）は驚嘆するのではないのでしょうか。

一月に300冊、年間3600冊、30年で10万冊、ほとんど天文学的な数字です。そしてこの膨大な量の書物の読破を経て自身あれだけ多くのしかも優れた著作物を生み出しているわけです。いい文章を書くためにはいい文章を読まなくてはいけないということでしょう。

むろん、立花さんのまねは普通の人には絶対にできませんが、それでも読むことの重要性はいくら指摘してもしすぎることはないと思います。書くためにはその何倍も読まなくてはならない。まずは読み込んでおいてそれから書くという段階に移行できるということです。

私たちは子供の頃から簡単な書物を読み始めて年齢が上がるに連れて段々難しい内容のものを読むように学校教育を受けているはずですが、学校で読む本だけでは不十分ですので、自宅へ帰って何か読書をするのが不可欠なのですが、ここできちんと読む人と読まない人の差が出てきますし、また社会人になってからも差が出てきますので、**年齢と共にそれまでの読書量に大きな差がつき、必然的に国語力、論理力に差がついてくる**わけです。

高校生あたりに（あるいは社会人も）英語の読解を指導すると、国語力のあるなしで、英文読解力に大きく差がつくことに気づくのはそういう経験のある人ならみな知っているはずですが。

もちろん、読むだけでなく書くことにおいても大きな差がついてきます。なぜならすでに説明しましたように「**読む力＝書く力**」だからです。ですから、作文が上手になる最大の要素はたくさん読むことになるのです。そしてたくさん読むためには必然的にそれは国語で書かれた文章ということになるはずですが。

外国語なら読む速度が圧倒的に遅いので、そう多くは読めないからです。ですから、作文の上達のためにはとにかくたくさん読んで論理力を鍛えて下さい。この鍛えられた論理力はそれが何語であっても通用するはずですが。

第3章

英語産業にご用心

「聞けなければ話せない」は大嘘

「聞き取れない英語は話せない」という事を言う英語業者がありますが、そんなことは絶対にないと断言します。なぜなら私自身かつて「聞けないけど話せる」人だったからです。私は中学の頃から英語が好きで文法などもしっかり勉強して、また発音についても教科書付属のテープを買ってきて音読したり、発音記号もきちんと理解して単語を覚える時に発音記号と一緒に覚えてきました。

教科書の内容をほぼ完璧にマスターしていました。そのかいあって英語の成績は非常に良かったです。私が高校1年生位の頃でしょうか、ある日浦添市(私の出身地で出生率日本一とヤクルトが春にキャンプを張ることで知られます)内のボーリング場の近くを友人数人と歩いているとアメリカ人と思われる(どう見ても沖縄人には見えない)女の子とその父親らしき人が近づいてきました。

「Hey, *#?¥B[]~g\$*+##?」何かを尋ねていることは状況でわかりました。さもなければ近寄ってくることもなかったでしょう。それほど、難しい質問でもないようでした。あれほど、テープを聴いて音読したりしていて、通っていた学校の生徒の間では英語の第一人者?を自負していた私です。

聞けないはずはありません(本当は教科書だけではリスニングは不十分)。ところが現実には悲惨なものでまったく何を言っているのかわかりませんでした。パニックになっている私を尻目にさほど英語が得意ではなかった友人の一人が「あそこにあるよ」みたいなことを英語で返事していたのです。

その女の子はお礼を言ってそのボーリング場へ向かっていきました。面目丸つぶれです。この件で私は「リスニングの才能がないのではないかと自分を疑い始めて、それまで志望していた英文科を法学部に変えるというおちまでつきました。

それから数年して東京の大学へ通っていた時にアメリカ人の友人が来て、英語を話す機会に恵まれ(半年位でその友人はアメリカに帰りました)練習もしていないのに、自分が思った以上に英語を話せることを発見して自信を得、ますます英語を話すのが得意になったことは既に書いたとおりです。

しかし、この時でもこちらの言いたいことはほぼ100パーセント表現できるのに対して相手の言うことは半分くらいしかわからないという状況だったので、やはり「リスニングは才能がないのでは」という思いを依然持っていました。それがそうではなかったという話はこれからお話しますが、このように私のように「聞き取るのは苦手でも話すのは得意」ということはありうるのです。

極端な話、話す練習ばかりして、聞く練習をまったくやらなければ当然そうなるでしょう。逆に最近多いのがトピックの勉強でリスニングばかりやっていて、リスニングは得意だが話すとなるとさっぱりという人です。

私が話すのは得意だったのは間違いなく、発音記号の習得や音読と文法、単語、読解の勉強をたくさんやっていたからで聞けなかったのは聞く練習をやってなかったからです。

さらに、勉強仲間で完璧なカタカナ英語だがリスニングは得意という人、あるいはその逆の人、これまでたくさん見てきたので、自信を持って聞き取る力と発音のよしあしはまったく関係がないと断言します。

さて、このように「聞き取れなければ話せない」というのは誤りなのです。この耳慣れたフレーズはリスニングの教材を売るためのおためごかしでしかありません。「聞き取れなくても話せる」状況はありえます。両方できないというほうがはるかにたくさんあるでしょうけど(笑)。

「発音できないと聞けない」というのは「だからこの発音の講座(教材)を受講しなさい、そうすれば(日本人が苦手な)リスニングも出来るようになりますよ」という甘い罠なのです。だまされてはいけません。

リスニング上達のポイントは3つだけ

リスニング上達のポイントは次の3つ以外ありえません。すなわち

- ①たくさん聞く
- ②聞き取れない箇所はスクリプトで確認する
- ③集中して聞く

何とか方式などと称した教材や講座がありますが、リスニングに関してはそういうものは一切ありえません。どんなに理屈をこねようと最終的には右の三つに収約されるはずで、ですから何も難しい話ではありません。極めて単純な話(高額な教材や講座は一切不要)なのです。

聞き取れない理由

英語が聞き取れない原因は大きく分けて2つしかありません。

- ①慣れが不足している。
- ②その音声に対するデータが頭の中にな

①に関してはたとえばスポーツがわかりやすいと思います。まったく初めてのスポーツをやったとします。ボクシングで考えて見ましょう。技術的なことをまったく教わらなくても毎日リングの中でパンチを出したりよけたりしていればだんだん慣れてきて強くなるはずで、

リスニングも同じで毎日聞いていればだんだん聞けるようになってきます。英語圏でしばらく生活するとだんだん英語が聞けるようになる(話すのも)というのは疑いのない事実です。

②に関してはたとえば知らない単語を話された場合、文脈から判断で

きる場合は別として基本的に聞き取れないはずですが。これは母国語でもそうで、本州にはない私の名前(古波蔵-こはぐら)を聞いた人の多くが「え？」という反応をするのはそういう理由からです。

また知っている単語でも自分の頭の中にある発音やイントネーションとは違う形で発せられると聞き取るのが難しくなります。スクリプトを読んでみても意味がわからないという場合も当然聞いて理解することはできません(この意味でリーディング力はリスニング力においても大きな意味を持っている)。

これはそのセンテンス全体の意味に関するデータがないということの意味します。このように単語、音声、センテンスこれらに関してそれが何を意味するのかデータがなければ聞き取ることはできません。

リスニングの訓練法

ではそうすればいいのでしょうか？

①に関しては明白です。慣れる、これ以外ありません。慣れるために必要なことは量をこなすということです。なるべくたくさん聞いて慣れる、これを実行します。

②に関してはそのデータを頭の中にインプットすることが必要です。具体的な練習としては、聞き取れないところをスクリプトを見てみます。知らない単語を調べる。発音に関してはどう発音しているかチェックする。あるところでイギリス人と話をしているとsupposeを「サボウズ」とpではなくbで発音していることに気づきました。何回聞いてもそんなのです。

そういえば、以前NHKのラジオ講座でリスニングの訓練をしていた時にもBBCか何かの東京特派員の女性がbで発音していて「変だな」と思ったことがあります。イギリス人は階級によって使う英語が違うというのはよく知られたことだと思いますが、おそらくこの2人はインテ

リ階級に属していてこの階級の人は「サボウズ」と発音するのだと推測しました。確認する機会はまだないですが。

オーストラリアの人も独特の発音「エイをアイと発音するなど」をすることが知られています。こういうデータがなければ聞いて理解できないはずですが。このようにデータを蓄積する作業が面倒くさいかもしれませんが、本当にリスニングを鍛えたいなら必要になってきます。

さて、このようにスクリプトを読んで意味がわかるかどうか確認します。読んでわからなければ、聞いても余計わからないからで、これは書けない英語は話せないのと同じ理屈です。知らない単語は調べます。こうして、読んで理解が出来たなら、そのスクリプトを使って音声と照らし合わせます。そして確かに音声と文字が一致していることを確認します。

最後に、スクリプトを見ないで音声だけで頭の中にその文字が、その意味が出てくるか確認します。1回で出来なければ、何回もこれを繰り返して音声だけで意味が頭に浮かぶまで持ってきます。そしてこれが出来たら、その音声の意味がデータとしてインストールされたことを意味します。今度その音声を聞いたら意味がわかるはずですが。

集中することが一番大事

①の対策としてなるべくたくさん聞いて慣れる訓練ですが流し聞きでは絶対に効果はありません。読解と同じ理屈です。英字新聞をただちらちら眺めるだけで意味がわかるようになるのでしょうか？もしそうなら非常に楽ですが、残念ながらこれは絶対にありえません。

知らない単語を調べることも必要ですが、一番大事なことは集中することです。スポーツでも学習でも人間というのは集中しなければ、上達しない仕組みになっています。集中してその意味をわかろうとしなければ絶対にわかるようにはなりません。英語圏で生活することで聞き取れ

るようになるのは聞き取れないと支障が生じるので一生懸命聞き取ろうとするからです(話すのもそうですが)。

英語圏にいても現地の人と交流して話そうとしたり聞こうとしたりしなければ絶対に上達しないのはハワイに留学した従妹三姉妹(学校の成績は決して悪くなかったですが)を見てよくわかりました。一人は米軍基地勤務ですが話せないのでストレスがたまるそうです。

電車内でのリスニングは効果がない

先述したことから必然的にこの結論が導かれます。電車内の騒音は相当なものです。私もやったことがあります。雑音がひどくてただでさえ聞き取りにくい英語が余計聞き取りにくくなり、効果はないと判断し、すぐに中止しました。

読む力をつける場合、小さな読みにくい字で書かれた文章を読む人はいないでしょう。特にノンネイティブにとっては字が小さいと頭の中に入れて来づらいのです。

学習はなるべく環境をよくして実施することが望ましいのです。リスニングに関しても音声をはっきりと聞ける状況で実施して下さい。私自身は中断したわけですがある会員の方から十年間電車内でリスニングしたが効果はなかったという話を聞いてやはりと思いました。電車内で十時間やるよりも、静かなところで集中して十分やるほうがいいでしょう。

「速聴」「精聴」は不正確

①を目的にしたリスニング訓練を速聴②を目的にしたそれを精聴と一般に呼んでいますがこの用語では誤解を招きます。①を目的にしたリスニング訓練ではスクリプトを使うことはありません。

慣れるのが目的なのでとにかくたくさん、しかももちろん集中して意

味を理解しようとして聞くことになります。スクリプトで確認したのでは量をこなせませんのでスクリプトは使用しません。

②を目的にしたリスニング訓練ではスクリプトを利用してきちんと確認してデータを蓄積します。もちろん集中しなくてはなりません。

どうでしょうか。こうしてみると①を実施する時のほうが②よりも早いわけではないことがわかります。別に音声の速度を変えるわけではありません。早い遅いではなく、スクリプトを使うか使わないか、こなす量が多いか少ないかの違いでしかありません。

また②のほうが①よりも集中して(よく演説でご精聴をと言いますが、集中して聴くという意味ですね)聞くわけでもありません。①②に限らず集中することが一番大事なことですから。

結論 速聴、精聴という言い方は間違いでスクリプトで確認するかしないかの違いでしかない。確認すれば主にデータの蓄積になり、確認しなければ量をこなせるので主に慣れるための訓練となる。私は「速聴」と「精聴」ではなく、スクリプトリスニング(SL)、ノンスクリプトリスニング(NSL)という呼び方をしています。

私のリスニング特訓物語①

私がかつてリスニングを苦手にしてきたことは既に説明しました。その原因ははっきりしています。リスニングの練習をやっていなかったのです。中学時代は英語教科書のネイティブによる録音テープを聴いていたとはいえ、それだけでは不十分で、ましてや高校へ行ってからはそういうことすらまったくやらなくなったのです。

ただひたすら、受験用に英単語を覚え、文法を学び、英文読解をやっていました。そのおかげで、スピーキングの下地は大いに出来たのですが、リスニング能力はまったく伸びませんでした。

いや、正確に言えば、下地は出来たのですが、それがきちんとした形で使えるようなものになるまでには至らなかったのです。大学を出た後は、沖縄へ帰って予備校で教鞭をとることになりました。

予備校業界は当時18歳人口が最も多い時期で景気のいい業種でした。もともと人を笑わせたりするのが好きなほうだったので、この予備校講師というのは私には天職でした。

しばらく予備校講師職を満喫していた(三年ほど東京の大手予備校でも教鞭を取りました)のですが、やがてそれまでの活況がまるでうそであったかのように「氷河期」に突入したのです。三十三歳の時に予備校に見切りをつけた私が目指したのが社会人対象の英語講師でした。

この頃は会社での昇進や社員採用において実用英語が重視され始めていました。ところがそれまで英語の資格といえば、中学2年のときに英検3級の1次試験に受かった(二次は未受験)だけという悲惨な状況でしたので、これは資格を取らないといけないということで目標にしたのが英検1級だったのです(TOEICについては後述)。

その前にまずは準1級ということで、これはすんなり受かりました。ただ、読解などのセクションが満点なのに、リスニングは5割程度というのが気になりました。次は1級です。結果は大惨敗でした。

単語は7割、読解は満点に対して**リスニングは3割**という超アンバランスな得点でやはりリスニングが大きな弱点であることを再認識したのです。

書店に行って、いろいろ拾い読みするとある本に「**リスニングが出来ないのは間違いなくリスニングの絶対量が不足しているからだ**」と書いてありました。言われてみれば確かにそうで、予備校時代にあれほど勉強した読解の点がよく、やる必要性も機会もなかったリスニングの点が悪いのは当然のことです。これがもし逆なら驚きですが。

ボーリング場パニック事件を思い出して、「やはりリスニングの才能がないのでは」と半ば諦めかけていた私はこれで俄然気を取り直して訓

練することにしました。あの本の作者には感謝しています。この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございます。それと同じように、この本を読んで後で「あの本読んでよかった」と思ってくれる人がきっといるはずだと思いながら真実をすべて公開しているのです。

私のリスニング特訓物語②

実際にどうしたかと言うと、もっぱらNHKのテキストを利用したSLを実施しました。当時ラジオだけでなく、テレビでもビジネス英会話をやっていたし、ラジオのビジネス英会話、英会話上級(当時はマーシャクラッカーさんが担当でした)など1週間に全部で併せて5つ位レベルに合うのがありましたので、それをすべて録音録画してテキストを買ってきて、きちんとスクリプトを確認しながら英語の音声を頭の中にインプットしていく作業を実施しました。

当時は今とは違って年に2回しか英検がなかったのです。初めて受けたのが六月で、その次は十一月ですがまだ受かるレベルまでできていないと判断して受験しませんでした。勝負は翌年六月です。さて、リスニングの訓練を開始してから効果が実感できたのは3ヶ月くらい経った時の事でした。

ふと「聞いて意味がわかる」事に気づいたのです。おそらく急にではなく徐々にそうなったのだと思いますが、とにかくその時初めて気づいたのです。試しに1級の過去問のCDを聞いてみましたが、やはり以前よりだいぶ聞きやすくなっています。

5割しか取れなかった準1級はこんなに簡単だったのかと思えるほどでした。このようにして翌年6月までリスニングの訓練を続けて当初の予定通り、合格しました。その時のリスニングの得点は6割程度でしたのでまだまだ弱点であることに変わりはありませんでしたが、不合格になるほど足を引っ張ることはなかったのです。

その後しばらくリスニングをサボっていたのですが、これではいけないということで、ある日訓練を再開しました。今度は別の方法で。

1級用にリスニングの訓練を開始したころは、まだネットが登場して間もない頃で、あまり情報が入ってこなかったのですが、受かって数年後に知人からネットでBBCなどの音声聞きつけてスクリプトも入手できるという貴重な情報（これを知らない英語学習者も多いようです）がもたらされ、これを活用してみることにしました。

費用がまったくかからないというすぐれものです。この方法で今度は前とは違ってもっぱらNSLを実行することにしました。1級受験前のSLである程度リスニング力は出来ていたので、おそらくNSLでもかなり効果があるだろうと思ったからです。

主に利用したのはBBCでした。ご存知イギリスが世界に誇る巨大放送網です。詳しくは知りませんがBBCの事務所がない国はないと言っていいのではないのでしょうか。このBBCには国内版と国際版がありますがもちろん国際版を聞いていました。国内版ではイギリス人にしかわからないような内輪の話題も扱うのでリスニングの訓練には不向きだからです。

今回のやり方は簡単です。たくさん聞く。ただそれだけでした。寝る時も聞きながら寝ていて、そうすると自分の夢と聞いている内容がいつしょになるという少し不思議なことも何度か体験しました。おそらく毎日5時間くらいは聞いていたはずです。

こういう生活を半年ほど続けました。どうなったか。結果は案の定でした。さすがにこれだけ大量に聞いているのですから、英語の音声に対する感覚が研ぎ澄まされてきてBBCの聞き取りがほぼ完全にできるようになっていました。

英検協会のHPでリスニング問題で実際に使われた音声を聞くことが出来るのですが、「こんなに遅く、内容も簡単だったのだろうか？」と拍子抜けするほどでした。

BBC以外にもABCというオーストラリアの公共放送もネット上で聞いていたのですが、こちらはやはりなまりがある事があるので、BBCとくらべると聞きづらいです。このようにBBCやABCなどで鍛えていると英検1級のリスニングはまったく苦にならなく(もちろんトピックも)なります。私の場合はこうして大の苦手のリスニングを克服しましたが、そうでなければこうして本を書くこともなかったでしょうから、私にとっては努力した甲斐があったとつくづく思います。あまりお金がなかった私には月々6冊合計2000円程度でリスニング力を大きく伸ばすことができたNHKのテキストには本当に感謝しています。

補足

私が学生の頃は学校でリスニングをやる機会はほとんどなく、必然的にリスニングが苦手な状況になってしまいました。私の場合はNHKなどで鍛えたわけですが、センター試験などで英語にリスニングのパートが導入されて以降は学校でリスニングの練習をやっているそうですから、それをベースにリスニングを鍛えればいいでしょう。

「聞いているだけで話せるようになる」は大嘘

こういう広告を見たことがあるでしょう。これ信じますか？ほんとなら、いいですね。私もやってみたいです。信じますか？もし、本当に「聞いているだけで話せるようになる」のであれば、これを売ってる会社は学校へ、いや、文部省へ売り込みに行けば、いいのです。私が文部省の英語教育担当者あるいは、学校の英語教師なら絶対に欲しいです！土下座してでも買いたいくらいです！

まるで夢のようですよ？聞いているだけで話せるようになるのなら。これなら何ヶ国語でも話せるようになるでしょう。日本人全員がこれからは、バイリンガルどころかマルチリンガルになるのです。

日本だけではもったいないので、この教材を世界中に売り込みに行きましょう。世界中から感謝されて、ノーベル賞もらうこと間違いなしです。なんで、この教材を学校に売りにこないのかなあ？不思議ですね。そう思うでしょう、みなさん？知り合いの弁護士にこれが刑法に抵触しないわけを聞いたら「詐欺罪は立証が難しいからでは」とのこと。この国の法律、どうもおかしいようです。

英語学習者を狙った良心的でない商法がこれ以外にも多々ありますのでだまされないように気をつけましょう。

卷末資料

リスニング出来るサイトの紹介

NSLにお勧め

① www.bbc.co.uk/radio/

上のページに行くと右のほうに6つのスピーカーのマークがあります。Listen to World Service Radio をクリックするとBBCのニュースが一日中聞けます。質がいいので、NSLにお勧めです。BBCは世界中いたるところからのレポートがあり、アナウンサーもさまざまな国籍ですので、さまざまな英語音声を目にすることが出来、国際英語のリスニング訓練としては最適だと思います。また、放送内容もかなり中立的でイギリス政府に対してもずけずけものを言ったりで、メディアとしての信頼度は大変高いものがあると言えるでしょう。内容もちろん面白いです。イチ押しです。

② www.abc.net.au/broadband/categories/radio.htm

これはABCというオーストラリアの公共放送のサイトで、ABC NewsRadioをクリックすると一日中、ニュースが聞けます。自局の以外にもBBC、ドイツ放送(英語)、オランダ放送(英語)などを流しています。このサイトも色々な英語が聞けるので本当にいいと思います。

SLにお勧め

① www.bbc.co.uk/worldservice/learningenglish/newsenglish/witn/archive_2004.shtml

BBCの英語学習者用のページです。アドレスが複雑なので、行き方を案内します。まず、<http://www.bbc.co.uk>に行ってください。左の枠にEXPLOREとかBROWS, NEWS, SPORTなどの文字がありますがその下から3番目にLearning Englishがありますのでそこをクリック。左の枠にLearning Englishというのがありますが、そのすぐ下のNews Englishをクリック。そうすると左にLearning English というのがあり、その下に 200X などと年号がありますので、

好きなのをクリック。そしたら出てきます。おめでとうございます。全部で8年分くらいのニュースのストックがあり、スクリプトがついています。

量は申し分ないですが、ニュースによっては雑音等で聞き取りにくいものがあります。こういうのは学習には不向きですので、音声的にいいものを選んで練習するといいいでしょう。スクリプトはそのままで字が小さく目が疲れますので、いい方法を教えましょう。PCのスタートをクリックします。コントロールパネルをクリックします。左上のデスクトップの表示とテーマをクリックします。画面解像度を変更するをクリックします。通常は解像度が1024×768ピクセルになっていますが、このボタンを一番左(小)までドラッグして800×600ピクセルにします。こうすれば、スクリプトの文字が大きく、見やすくなり、目の負担が小さくなり楽です。このメモリ上の適当位置にカーソルを合わせてクリックすれば元の解析度に戻ります。もちろんプリントしてもいいです。

② www.voanews.com/english/categories.cfm

VOAです。REGIONSとTOPICSに分かれています。下のREGIONSのほうが利用しやすいでしょう。例えばEconomy and Financeを押すと、たくさん出てきますが、スピーカーマークのついているものは音声、テレビマークなら、なんとテレビが見れます。スクリプトもすべてついています。マークのないのはスクリプトのみ。

①Larson Report (MP3) - Download 979k

②Larson Report (Real) - Download 647k

③Listen to Larson Report (Real)

こういう具合になっていることがあります。①は右クリックして「対象をファイルに保存」で保存できます。②も同様です。①と②の違いはファイルの形式だけです。③は聞くのは出来ませんが保存はできません。

初級、中級者向けのサイト

<http://www.voanews.com/specialenglish/index.cfm>

VOAの中にあります。このページは英語学習者のためにあり、話す速度がかなりゆつりとしたものになっていますので初級者、中級者に最適と言えるでしょう。大量の音声とスクリプトがついています。これで物足りなくなったらSLにお勧め②にレッツゴーです。

その他のサイト

① www.abc.net.au/broadband/categories/

ABCサイト内のページで4つの画面をクリックするとニュース番組を見ることができます。画面の下のほうに音の大きさのつまみがあり、シアターモードで見られることも出来ます。途中で接続が途切れることもあります。

② www.abcnews.go.com

アメリカの大手放送ABCです。赤い字でVIDEOとある箇所をどれでもクリックするとビデオ画面が出ます。>MAIN MENEWをクリックするとメニューが出ます。ハリウッド映画なども含めて色々なジャンルがありますので、好きなものを探すといいでしょう。画面が小さいのが唯一の欠点です。

③ <http://news.bbc.co.uk/>

BBCのトップページです。とにかく巨大でほとんど迷路ですね。ラジオ番組も数え切れないくらいあります。最新のニュースが映像つきで聞けますが非常に音質が悪く、学習には不向き。音声だけのものは音質は悪くありません。

④ <http://www.npr.org>

アメリカの公共放送として有名なNPRです。NPRはアメリカ人がもつとも頻繁に聞くラジオ放送であると言われています。このサイトには膨大な量の音声も蓄えられています。ただ、BBCのように、聞きっぱなしは出来ません。

(注)これらのデータは本書製作時のものなので、変わっている可能性があります。改訂するごとにアップデートしていきます。

決まりきった会話表現

以下A-Cの表現はすべて英でも米でも使われる表現です。

A.(絶対覚えて下さい)

元気ですか	How are you?
元気です。あなたは？	I'm fine[well]. And you?
はじめまして	Nice to meet[see] you.
(帰り際) 会えてよかったです	How do you do? (堅苦しい言い方)
(それに対して)こちらこそ	(It was) nice meeting you.
また会いましょう	Nice meeting you, too.
また、明日	See you (again).
お久しぶり	See you tomorrow.
(丁寧な言い方は)	Long time no see.
何か変わったことない？	I haven't seen you for a long time.
～によろしく	What's new?
(電話で)どちら様でしょうか？	Say hello to～. Remember me to～.
(電話で) 隆です	Who's calling?
(電話が) 話中です	(This is) Takashi speaking.
電話番号違いますよ	The line is busy.
彼は別の電話に出ています	You have the wrong number.
いらっしゃいませ	He is on another line.
ただいま	May[Can] I help you?
気をつけてね	I'm home.
残念ながら	Take care.
残念ながら～ない	I'm afraid ～.
	I'm afraid not.

それを聞いて残念です。

残念。お気の毒に。

残念！

乾杯

どういたしまして。

間違いなく～

～は間違いないの？

(伝聞)～らしいね

～に見える[思える]

いい考えだね

気にするな

仕方がないよ

よりけりだよ

どうぞ、ご自由に。

～はどうしたのか[何か悪いのか]

～はどうなったのか

気楽に。

(何か渡す時)はいどうぞ

(あいづちを求めて)そうだろう？

(あいづちで)そうなんですか。

(あいづちで/驚いて)本当に？

わかります

わかりますか？

大きなお世話だ

ほっといて

髪を切った。

I'm sorry to hear that.

(That's) too bad.

What a shame[pity]!

Cheers! 他いろいろあります

Don't mention it.[You're welcome.]

I'm sure ～

Are you sure ～?

I hear (that) ～/They say (that) ～

(It) looks[seems] like S V.

(It) sounds like a nice idea.

Don't mind.

It can't be helped. I can't help it.

(That) depends.

Help yourself.

What's wrong[the matter] with ～?

What has become of ～?

Take it easy.

Here you are. Here you go.

(Is that) right?

Is that so?

Really?

I see./I understand.

Do you see?/Do you understand?

Mind your own business./

None of your business.

Leave me alone.

I had a haircut.

(注)I cut (my) hair.では自分で切ったことになります

1年ぶりに	for the first time in a year
がんばって	Do your best./ Good luck!
気をつけないと!	Watch out!
お先にどうぞ	After you.
店内でしょうか、お持ち帰り	For here or to go?
でしょうか?	
いえ、結構です	No, thank you.
ええとー	Let me see./ Well.
ほらね?	See?
すみません	I beg your pardon.
もう一度言ってもらえますか?	(I beg your) pardon?
(注)上とは違い、pardonを上げ口調で発音します。	
何が起きてるの?	What's going on?/ What's up?
君次第だ	It's up to you.
(相手からの言葉に)君もね	The same to you.
(注文で)ここも同じのを。	Same here.
僕のおごりです	It's on me./ It's my treat.
なぜ～ではないのか?	Why not?
そうだといいね	I hope so.
そうじゃないといいが	I hope not.
(部屋の中から外に)だれ?	Who is it?/ Who's there?
(感想) ～はどうですか?	How do you like ～?
(感想/薦め) ～はどうですか?	What[How] about～?
～したらどう?	Why don't you ～?
～しようよ	Why don't we ～?
どうぞ/さあ、さあ	Go ahead. 促す時に使います
～しても構わないでしょうか?	Do you mind if I ～?
(返事1)ええ、どうぞ	No, (not at all).
(返事2)やめてください	Yes, I do.

B(出来れば使いこなしたい)

まさか!	Impossible!
いや、あまり。	Not really.
いいかい(呼びかけ)	You see, I'm so tired.
それだ!	That's it!
先着順で	First come, first served.
それはあとでもいいよ	That can wait.
せかすな	Don't hurry me.
確かに～	You bet ～
きっと～	I bet ～
そのままにしておきなさい	Let it be./Leave it as it is.
それで決り!	It's a deal!
彼らしいね	That's just like him.
出かけますよ	I'm off.
もう行かなくては	I must get going/I must be off.
調子はどうですか?	How (are) you doing?
絶対にない[いや]	No way!
誰も知らないよ	Who knows!
～してもむだだ	It's no use ～ing.
～することはできない	There is no ～ing.
気にしないよ	I don't care.
気にするよ!	I care!
(呼びかけ)ねえ	You know, he is kind of cool.

(注)この表現よく使われますので、意味を覚える必要があります。しかし、なれなれしい響きがあるので、公場では使ってははいけませんし、それ以外

もあまり使いすぎないように。他の使い方もあります。

(強調) It's your fault, you know. …、わかるだろう？

(つなぎ言葉) Well, you know, …

(注意を喚起) You know, I actually did it and … いいかい

C(出来れば知っておいたほうがいい)

朝一で	first thing in the morning
お構いなく	Don't bother.
勝負はこれからだ	It's just the start.
今、手が離せないんです。	I'm tied up now.
よくもそんな口が聞けるな。	How dare you speak like that?
あつかましい！無神経な！	He has a nerve./What a nerve!
恥を知れ	Shame on you!
だから、何？	So what?
もうたくさんだ。	I've had it!
何様のつもりだ？	Who do you think you are?
いつの間にか	without realizing[noticing](it)
参考までに	For your information,
助かった！	What a relief!/ That's a relief!
大変！大変！	Guess what!/ You know what?

(注) 何か驚くような話をする前置きです。

いい考えがあるんだけど (I/I'll)tell you what

いいかげんにして！ Come on! 他の意味もあります。

(僕も言いたかったのだが)

よく言った！ You said it!

そのとおり、僕もそう You're telling me.

思っていた

言っていること、わかります。 I'm with you.

同感です。

まったく、同感です。

それでいいんだよ。

うらやましくない→大変ですね

こんなこと、想像もしなかったよ！

わかった！

ほら、言ったとおりだろう？

また始まった！

5人ずつのグループに分かれて

おえっ！（気持ち悪いときなど）

うぬぼれるな

もうたくさんだ！

自業自得だよ。

（怒って）もう終わり！

絶対に許さない

こう言うてはなんですが…（丁寧）

何か心配事でも？

I'll drink to that!

You can say that again.

That's the spirit.

I don't envy you.

Imagine that!

I got it! getは「わかる」の意

There you are.

There you go.

Fall into groups of five.

Yuck!

Don't flatter yourself.

That does it!

It serves you right./

You asked for it.

That's that!

Over my dead body!

if I may [might] say so

What's eating you?

以下の4つは米語ですが、アメリカ人が良く使うので（こちらが
使う必要はないが）覚えておいたほうがいいでしょう。

がんばれ。

おやまあ。

間違いなくそうなる

議論終わり！

Hang in there! Hold on!

Boy! 感嘆詞です。少年ではなく。

Sure thing.

Period!

平成21年大晦日のBBC放送のニュース

A British man convicted of drug smuggling in China has been executed, despite pleas for clemency from the British government and his family, who say he was mentally ill.

Fifty-three-year-old Akmal Shaikh, who maintained that he had been tricked into carrying the drugs into China, was killed by lethal injection. The British Prime Minister, Gordon Brown, said he was appalled by the execution.

China responded by expressing strong dissatisfaction with British accusations that its judicial process had been faulty.

(内容)

中国の法廷で麻薬密売で有罪判決を受けたイギリス人男性が、イギリス政府と彼の家族からの寛大な処置の要求を聞き入れない形で、処刑されました。家族によればこの男性は精神的な病をわずらっていたとのこと。

この53歳のアクマル・シャイクさんは「自分は騙されて麻薬を中国へ運びこんだだけだ」と主張していましたが、致死量の毒薬注射によって死に至りました。イギリスのゴールドン・ブラウン首相は今回の死刑執行に戦慄したと述べています。

「今回の裁判には過失がある」というイギリス政府の非難に対して、中国政府は強い不満を表明しています。

(著者紹介)

古波蔵 いさむ(こはぐら いさむ)

沖縄県浦添市にて出生。市立仲西小・中、県立浦添高校を経て、法政大学法学部へ。大学を出たあと、大手予備校などで大学受験講師として活躍。その後、英検1級および通訳案内士国家試験対策を目的とする総合英語研究会を設立。これまでに多くの合格者を輩出。長年にわたるプロ英語講師としての経験から「英語の習得は世間で思われているよりもずっと簡単で、留学も英会話学校も不要」が持論。取得資格は英検1級、TOEIC990、通訳案内士国家資格など。これまでの著書は本書の他、「NHK英語3tの謎」「逆転の英単語集」など
